

富士

岡本かの子

青空文庫

人間も四つ五つのこどもの時分には草木のたたずまいを眺めて、あれがおのれに盾突くものと思ひ、小さい拳こぶしを振り上げて争う様子をみせることがある。ときとしては眺めているうちこどもはむこうの草木に氣持を移らせ、風に揺ぐ枝葉と一つに、われを忘れてゆららに身体を弾ませていることがある。いづれにしろ稚純な心には非情有情の界を越え、彼ひと此この區別を無なみする単直なものが残っているであらう。

天地もまだ若く、人間もまだ稚純な時代であつた。自然と人とは、時には獐どうもう猛もうに鬪い、時には肉親のように睦むつび合つた。けれどもその鬪うにしろ睦ぶにしろ両者の間には冥通する何物かがあ

った。自然と人とは互に冥通する何者かを失うことなしに或は争い或は親しんだ。

ここに山を愛し、山に冥通するがゆえに、山の祖おやのかみ神かみと呼ばれる翁おきながあつた。西国に住んでいた。

平地とっこつに突兀とつこつとして盛り上る土積。山。翁は手を翳かぎして眺める。翁は須臾しゆゆにして精神のみか肉体までも盛り上る土堆と関聯した生理的感覚を覚える。わが肉体が大地となつて延長し、在るべき凸所に必定在る凸所として、山に健やけきわが肉体の一部の發育をみた。

翁は、時には、手を長くさし出して地平の線に指尖すすきを擬する。地平の線には立木の林が陽を享けて薄すすきの群れのように光っている。

翁は地平のかなたの端から、擬した指尖を徐ろに目途の正面へと撫で移して行く。そこに距離の間隔はあれども無きが如く、翁の擬して撫で来る指の腹に地平の林は皮膚のうぶ毛のように触れられた。いつまでも平の続く地平線を撫で移って行く感覚は退屈なものである。人間の翁がそう感ずると等しく、自然自体も感ずるのであろうか、翁の指尖が目途の正面を越して反対側へ撫で移るまもないところから地平は隆起し、麓から中腹にさしかかり、ついに聳え立つ峯巒となる。遠方から翁の指尖はこつに嵌ったその飛躍の線に沿うて撫で移って行くと音楽のような楽しいリズムを指の腹に感ずる。地の高まりというものは何と心を昂揚さすものであろう。人を悠久に飽かしめぬ感動点として山は天地間に

造られているのであろう。

火の端はたで翁は、つれづれであつた。翁は腕を動かして自分の肉体の凸所を撫でまわす。肩尖、膝頭、臀部、あたま——翁の眼中、一々、その凸所の形に似通う山の姿が触覚より視覚へ通じ影像となつて浮んで来た。

山処やまとの

ひと本すゝぎ

あささめ

朝雨の

狭霧さぎりに将起たぐんぞ

翁は身体を撫でながら愛に絶えないような声調で、微吟した。

山又山の峯の重なりを望むときの翁は、何となく焦慮を感じた。

対象するもののあまりに豊量なのに惑喜させられたからだつた。翁は掌を裏返しに脇腹を焦じれつたそうに搔かいた。

峯々に雲がかかっているときは、翁は憂うれたげな眼を伏せてはまた開いて眺めた。藍墨の曇りの掃毛目はけめの見える大空から雲は剥はがれてまくれ立たつた。灰いろと葡萄ぶどういろの二流れの雲は峯々を絡み、うずめ、解けて棚引く。峯々の雲は日のある空へ棚引いては消え去る。消え去るあとからあとから、藍墨の掃毛目の空は剥離して雲を供給する。峯はいつまで経つても憂愁の纏てんりゆう流りゅうから免れ得ないようである。それを見ている翁は、心中それほどの苦悩もないのだが、眼だけでも峯の愁いに義理を感じて、憂げに伏せてはまた開くのであつた。そのうち翁は眼が怠だるくなつて草原へごろりと

臥ねてしまった。雲の去来は翁の眠っている暇にも続けられていた。だが、やがて雲は流れ尽き、峯は胸から下界へ向けて虹をかけ渡していった。

西国にて知れる限りの山々を翁はみな自分の分身のように感じられた。翁は山々を愛するがゆえに、それ等の山々の美醜長短を、人間の性格才能のように感じ取った。事実、山には一目見ただけでも傲慢であつたり、独りよがりのお人好しであつたりしような性格に見立てられるものがある。翁がみるところによると、どの山の性格でも翁自身の性格の中に無い性格はなかつた。中には自分に潜かえんでいて、却かえつて山に現れ出て、逆に自分に気付かせられるようなこともあつた。翁は山を愛するが、しかし山を惧おそれ、そ

して最後に山を信じた。

翁は妻との間にたくさんこどもを生んだ。こどもが生れて一人動きできるようになる、翁はこれを山に持って行って置いて来た。

山の麓にこどもを置去りにして来て、果してそれで育つものかどうか危ぶまれた。しかしどこへ置いたところでその幸さちのないものは、育つた方が却って面白からぬことになるような育ち上りをしてしまうかも知れない。それなら一つそ、こどもを好きな山に賭けよう。山が育つべく思うほどのこどもなら山は育てよう。少くともこれほど信頼する山が悪しゆうは取計う筈はあるまい。もしこの上にして育たぬようだったら、山よ、わたしは諦める。だ

が、山よ、出来得べくはなる丈たけ育てて呉れ。翁はこどもを山の方に捧げ、ひよこひよこひよここと三つお叩頭しぎをして、置いて帰った。愛別離苦の悲しみと偉大なものに生命を賭ける壮烈な想いで翁の腸は一ねじり振れた。こどもを山にかずける度びに翁の腹にできたはらわたの捻ねんてん纏まとは、だんだん溜ためつて翁の腹を縲にまの貝の形に張り膨らめた。それに腹の皮を引攀ひきつられ翁はいつも胸から上をえび蔓つるのように撓たわめて歩いた。

こどもの中には餓え死んだり、獣の餌になるものもあつたが、大体は木の実を拾つて食い、熊、狼の害を木の股、洞穴に避けて育つた。山は害敵とそれを免れるものと両方を備え無言にして生命それ自ら護るべき慧智を啓発した。

こどもたちは父親の翁に似て山が好きだった。その性分の上にあけ暮れ馴染む山は、はじめは養いの親であり、次には師であり、年頃になれば睦ぶ配偶でもあった。老年には生みの子とも見做される情愛が繋がれた。死ぬときには山はそのまま墓でもあった。しかし、生涯、山に親しみ山に冥通する何ものかを得たこどもたちは、老年に及び死を迎えるまえに生命を自然の現象に置き換える術を学び得ていた。彼等は死の来る一息まえ、わがいのちを山の石、峯の雲に托した。それゆえ彼等は悠久に山と共にしずも鎮り、峯に纏まとつて哀愛の情を叙することができる。

翁はその多くのこどもを西国の名だたる山に、ほぼ間配まくばりつけた。比叡、愛宕、葛城、鈴鹿、大江山——当時はその名さえ無か

つたのだが、便利のため後世の名で呼んで置く——山ほどの山で翁のこどもの棲付かぬ山もなかつた。

山に冥通を得たこどもたちは、意識に於て「妙」というほどの自在を得た。離れたときには山と自分と相對した二つとなり、融ずるときには自分を山となし、或は山を自分とする一致ができた。山におのおの特殊の性格があることは前の条で説いた。こどもたちは育つた山の性その如き人間となつた。身体つき容貌まで何やら山の姿、峯の^{おもかげ}梯に似通つて見えた。西国の山は冬は脱ぎ夏は緑を装つた。こどもたちも亦冬は^{また}裸に夏は藤ごろもを着た。緑の葉に混る藤の花房が風にゆらいで着ものから紫の^{しずく}雫を^は撥ねさした。

もとより山のことにかけては何事でも暗^{そら}んじているこどもを、

麓の土民たちはその山の神と呼んだ。そして侍かしずき崇むる外に山に就ての知識を授けて貰った。たつきの業わざを山からかすけられて生な活する麓の土民は、山の秘密や消息を苦もなく明す人間を、感謝し、惧おそれ、また親しんだ。ときどきは神秘に属する無理な人間の願ねぎごと事をも土民はこどもに山へ取次ぐよう頼んだ。こどもは苦笑しながら、しかし引受けた。冥通の力によつて山に土民たちの望むことを聴き容れさしてやった。土民たちは助つた。

山の祖おやのかみ神の翁は西国の山々へはほとんどこどもを間配り終り、その山々の神としての成長をも見届けた。いまは望むこともないように思われた。ただ東国に目立った二つの山があつて神々を欠くという噂を聞いていた。それは、どんな容貌性格の山だろ

うか、その性格は自分如きには無い性格の山だろうか。まだ見ぬ東国の山は翁に取つていま、一層に、慕^{した}わしいものとなつた。それへも骨肉を分けて血の縁を結んだなら自分の性格の複雑さも増す思いで、分身を雲の彼方にも遺す思いで、自分はどのようにかこの世に足り足らいつつ眼が瞑れることだろう。翁に、末のことも姉と弟があつた。深く寵愛していたのでまだこの山へも送らず、手元で養つていたのであるが、翁はとうとう決心した。翁は姉と弟を取つて東^{あづま}路へ帰る旅人の手に渡した。翁は眷^{けんぞく}属の繁栄のため、そのおもい子を遥なるまだ見ぬ山の麓へおもい捨てた。

自然に冥通の人間の上に、自然が支配する時間の爪の搔き立て方は人間から緩急調節できた。翁の上に幾たびかの春秋が過ぎた。けれども、翁の齡よわいおいの老に老の重なるしらしいものは見えなかつた。翁は相変わらず螺の腹にえび蔓の背をしてこそおれ、達者で、あさけ夕風には戸外へ出て、山々の方を眺めた。そして心の中で、わが眷属は、分身は、性格の一面は、と想つた。想う刹那せつなに、山々の方から健在のしるしの応答うけえが翁の胸をときめかすことによつて受取られた。翁は手をその方へ掲げて、彼等を祝福した。

ただ東国の方へ遺つた、まだ見ぬ山に棲める筈の姉と弟の方からは、翁のこれほどの血の愛の合図をもつてしても何の感応道交

も無かった。翁は白い眉を憂げに潜め

「除汝、なおきて除汝、なおきてはや」

そういつて力なく戸の中に戻った。

空間といえども自然の支配下のものであろう。自然に冥通を得た翁の、僅にあずまと離れた空間の隔りに在る二人のいとし子に冥通の懸橋をさし懸けられぬいわれはなかつた。だが翁の心に於て、まず最初に、こどもの存否を氣遣う疑念があつた。懷疑、躊躇ちゆうちよ、不信、探りごころ——こういう寒雲の翳は、冥通の取持つ善鬼たちが特に働きを鈍らす妨げのものであつた。この翳が心路の妨げをなすことはただ人同志の間にもあることであらう。危む相手にまごころをば俄にわかにはうち出しにくい。

翁は謙遜けんそんな人であつた。たとえ長寿を保つことに自在を得て
いるにしろ、翁は人並を欲した。翁はこの時代の人寿のほどおもんばかを慮
つておよそこれに倣ならおうとした。その目安をもつて計るに、もは
やわが期すべき死は生き行きつつあるいまの日よりだいぶ前に過
ぎ越している。翁は苦笑しながら直ちにも雲を変じ巖に化しても
大事なとは思つた。しかし人間に居し人情を湛えた生涯を尽す
最後の思い出にはどうか東国に送つた二人のこどもの身の上を見
定めてからのことにしたいと考えた。すでに死を期しては月色に
冴えまさり行く翁の心丹に一ひら未練の情がうす紅色に冴え残つ
た。翁は意識にこれを認めると、ぽたりぽたりと涙を零した。

翁は、螺の腹にえび蔓の背をしたまま旅かれいの餉かを背負い、杖を手

にして東路に向つた。妻は早く死に、陽のさす暖い山ふところの香高い橘の木の根方に泰らかに葬つてある。もはやうしろ髪ひかるる思いのものは西国には何ものも無かつた。

とりに 鶏が鳴いて東の国の夜は開けかけた。翁はきようこそ見ゆれと

旅路の草の衾ふすまから起上がった。きようもまた漠々たる雲の幕は空

から地平に厚く垂れ下り、行く手の陸の見晴しを妨げた。風は森びようびよう

々々たる海面から吹き上げて来て空の中で鳴つた。風の仕業しわざか

雲の垂幕は無数の渦を絡み合せながら全体として、しずかにしずかに、東の方へ吹き移されて行く。いくら吹き移されても雲の垂幕は西のあとから手繰たぐられて出た。翁は目あての山の一つが見え

る筈の東国へ足を踏み入れてから毎日この雲の垂幕に向つて歩んでいる。山の祖おやのかみ神の翁はその冥通の力をもつて、これはこの山は物惜しみする中年女の山なのではあるまいかと察した。また恥かしがりやの生娘の山なのではあるまいかと思つた。西国の山にかけては冥通自在な翁も、東国へ足を踏み入れ東国の山に対するとき、つい不勝手な気がしてその冥通の働きをためらわした。そこに判断を一一ふたわた互さわらす障りがあつた。

季節は初冬に入つていた。旅寝の衣には露霜が置いていた。翁は湿り気をふるつて起上つた。僅かに残つている白い鬢髪からも長く垂れた白い眉尖からも雫が落ちた。雨風に曝され見すばらしくなつた旅の翁をどこでも泊めようとしなかつたのだ。翁は煩わ

しく雫を払いながら朝あさがれい餉を少し食べた。持ち互つて来た行糧ももはやほとんど無くなっていた。翁は朝餉を食べ終ると冷えた身体を撫でさすりいささかの曖昧に心を引立たして貰つて、きよ
うの旅路の踏出しにかかった。

鶏はおちこちで鳴き盛つて来たが、行く手の垂れ雲は晴れよう
ともしなかつた。捲き返す浪打際のいさごを踏んで翁はとぼとぼ
と辿たどつて行つた。海上の霧のうすれの明るみに松の生え並ぶ白州
の浜が覗かれた。翁は島かとも見るうちにまた霧に隠れた。

その日の夕近く、翁は垂れ雲を左手にした、垂れ雲の幕の面を
平行する行路の上を辿るようになった。落日の華やかさもなく、
けさがたからの風は蕭しょうしょう々しょうしょうと一日じゆう吹き続けたまま暮れて

行くのであるが、翁には心なしが、左手の垂れ雲の幕の裾が一二尺掠り除れて行くように思われた。あたりが闇に入る前に、翁はその幕の掠り除れた横さまの隙より山の麓らしい大ような勾配を認めたとように思った。

草枕、旅の露宿に加えて、夢も皺しわかく老の身ゆえに、寢覚めがちな一夜であるのはもつとものことだが、この夜は別けて翁をして寝付かれしめぬものがあつた。翁は興奮に駆られて自ら歡びをたしなめる下からまた盛り上る歡びにうたた反側しながら呟いた。

「山近し、山近し」と。

あくる日は翁は一日歩いて、また一二尺掠り除かれた雲の裾か

ら山の麓ふもとを、より確かに覗き取ったが、歩めども歩めども山の麓の幅の尽きらしい目度めどを計ることができなかつた。

年寄の歩みはただどしいにしても翁は次いで三日も歩んだ麓の幅を計ることはできなかつた。

これはひよつとしたらいくつかの山の麓が重り合っているのではないかと翁は疑つた。でなければ、麓の丸の縁へりに取り付いてぐるぐる廻りをしているのではあるまいかとも思つた。

雲の裾は、今度は数間の丈けに掠り除られ、そのまま止まつて少しも動かなくなつた。その拡ごりの隙より、今や見る土量の幅は天幅を閉ふたぎて蒼穹は僅かに土量の両鰭ひれに於てのみ覗くを許している土の巨台に逢着した。翁は呆あきれた。これが普通という山の麓で

あることか、おおらおおら。

翁は、慄えながら行き合せた野の人に訊ねた。そして、山は福ふくじのたけ
慈岳、
います神は福慈神ふくじのかみといふのであると教えられた。

たそがれは天地に立籠め、もの皆は水のいろに漂いはじめたが、ただ一つ漂わされぬものがあつて山ふもとの薄明りの野に、一点の朱を留めていた。それは庭の祭りのかがり火であつた。神樂かぐらの音も聞えて来る。

かがり火は、薪木の性と見え、時折、ぷちぱちと撥ね、不平そうに火勢をよじりうねらずが、寂莫たる天地は何の攪かき乱さるる様子もなく、天地創つてこのかた、たそがれちようものの待つ、

それは眠るにも非ず覚めたるにも非ざる中間に於て悠久なるものを情緒に於て捉えようとするかれ持前の思惟の仕方を続けている。水のいろをかがり火のまわりに浸して静に囲んでいる。

かがり火も張合いがなく、まもなく火勢をもとの蕊立ちの形に引伸し焰ほのおの末だけ、とよとよとよとよと眩かしている。神樂の音が聞えて来る。

晩秋の夕の露氣に亀縮かじかんだ山の祖おやのかみ神の老翁は、せめてこのかがり火に近寄つてあたりたかつたが、それは許されないことである。今宵のこの庭のかがり火は純粹な神のみが使う資格のある聖なる祭の火であつた。一点の人情をつけて恋々西国より東国へ娘の生い立ちにを見に下つた螺の如き腹にえび蔓のような背をし

た老翁は、たとえ自然には冥通ある超人には違いないが、なお純粹の神とはいわれなかつた。生きとし生けるものの中では資格に於ていわば半人半神の座に置かるべきものであつた。

娘の福慈ふくじの神もそれをいい、純粹の神の氣を享けて神の領から今年、神がはじめてなりいでさせ給うた神のなりものによつて純粹の神を餐あえまつることのよしを仲立なぐさに、一元ひとに敏とく貫くいいのちの力により物心両様の中核を一つに披ひらいて、神の世界をまさしく地上に見ようとする純粹にも純粹を要する今宵の祭に、鶏の毛ほどでもこと人の氣のある生けるものは、たとえ親でも遠慮して欲しいといった。娘の神が神としていちばん大事な修業しゆぎやうをする間、少しでも娘の氣を散らさないよう、爪あかの垢かほどの穢けがれを持来もさしめ

ぬよう心懸けて呉れるのがほんとの親子の情だといった。

山の祖神は、山の裾野へさしかかつて四日目にもう一日歩いて、たそがれ、かがり火を認めてたずね寄ったのではあったが――

東の国のまだ見ぬ山へ、神として住みつきもやすると思ひ捨てた覚悟のもとに旅人に托けて送った末の娘が、思ひ設けたより巨岳の山の女神となつて生い立ちなりわいつつあるのに、山の祖神は首尾よくめぐり会つたには違いないが――

その夕は相憎あいにくとこの麓あしの里で新粟を初めて嘗むる祭の日であり、娘の神の館は祭の幄舎あくしやに宛てられていた。この祭には諱忌ききのあるものは配偶さえ戸外へ避けしめる例であつた。生みの親の、その肉親の纏てんぱく白の情は、殊に老後の思ひ出に遙々たずね當つた

稀まれなる歡びは心情の捻纏を一層に煩わしくしよう。娘の神は父の老翁に、こういう慮りから、宿は村里の誰かの家へ取つてあげますから、祭の今夜一夜だけは自分の家をば遠慮して欲しいと頼んだのであつた。

翁のふる郷の西国の山々にも新粟を初めて嘗むる祭はあつた。しかしかかる純粹と深刻さで執り行ふ祭を、修業としての心得を、翁は東国へ来て生い立つた娘の神からして始めて聞いた。

翁は娘の神が口にしたこと人という言葉をしきりに氣にした。遙々尋ねて来た生みの親に向つてこと人だという。何という薄情な娘なのだろう。しかしわけを聞いてみればその道理もないことはない。ふる郷を立つときから紅色に萌し始めた人情の胸の中の

未練のほむらは子の慕わしきにかき立てられ旅の憂さに揺り拵げられ、こころ一面に燃え盛っている。福慈の神に出会い一目それをわが娘と知るや無我夢中になつてしまつて、矢庭やにわに搔き抱こうとした旅塵の掌で、危うく白しろたえ妙いつきの齋いつきむしろの衣けがを穢けがそうとして、娘に止められて気が付いたほどである。これからしてみれば、一夜の間は心を静め澄さねばならない女神いつきむしろの齋いつきむしろの庭むしろにかかる動きゆらめくものが傍におることは親とはいへ娘の神の為めにならないことは判り切つた話だ。ならば娘の神のいう通り村里へ下つて娘の神のいい付けて呉れた誰かの家へ行つて泊つてもやり度い。だが翁にはそれはできなかつた。

娘の神が自分をこと人といつたのは今夜の神聖に対し一夜だけ

のことにしていったのであろうか、それとも幼くして遙な国へ思
い捨てた父に対しての無情の恨みの根を今も深く持ち添えそれで
いったのであろうか、それが気になった。前の方の理由からなら
ば一夜ぐらい離れていることはとかくに辛棒はしてもいい。しか
し後の方の理由からとしたならこれは卒爾そつじには済まされんことだ。
そうしたことには山の祖神として自分にわけも気持もあつてした
ことの解き開きを娘の神にとくと諾うなずかして、根に持つ恨みを雪解
の水に溶き流さすまではかの女の傍からは離れられない。そのこ
とで今世の親子の縁は切られ度くない。そう思つてかさにかかつ
て翁の娘の神に詰め寄りなじりかかろうとする刹那に神楽の音が
起り祭が始つてしまった。本意なくも庭外まで退いたのであつた

が。腹はむしやくしやすると同時に堪えぬなつかしきの痛み、悔
いないでよいことへの悔い——そういつたことでごちやごちやに
なっていた。せめて娘の姿の望まれるところでしばらく心を宥め
よう。それにしても子というものは、しばらく離れてめぐり会つ
た子というものは何と人間のような血の気を神の胸にも逆上さす
ものである。これが大自然に対しては冥通自在を得た山の祖神
ともいわれるものの心行かよ。翁は庭のはずれの台のところに来
て蹲りながら苦笑した。
うづくま

台の傾斜からは麓の野を越して、たそがれの雲の帳が望まれた。
上見ぬ鷺の翔らん天ぎわから地上へかけて雲の帳は相変らずかけ
垂れていたが、深まり来るたそがれの色にあらがうように帳の色

は明るく薄れ行きつつある。それにつれて帳の奥の福慈岳ふくじのだけの姿はいまや山の祖神の前に全積を示しかけて来た。祖神の翁は片唾かたずを呑んだ。

およそ山を見るほどのものの胸には山の高さに対して心積りというものがある筈である。見るほどのものはあらかじめの心積りの高さを率て実山に宛嵌あてはめ眺めるのであった。実山の高さが見るものの心積りの高さにかんりの相違があつても、全然見るものの心積りを根底から破却し去らない限り、そこに観念なるものと実在なるものと比較し得られるかけ棧はしがあつてその上に立ち見るものをして両端の距りを心測して愕おどろきの妙味を味い得しめるよすががある。ここにもし実在が観念と別な世界ほどの在りようで比較

の棧はしを徹し去らるときわれ等の心路は何によつて味覚に達すべき。かかるとき愕きもない平凡もない。強いていおうならば北斗南面して看るといふ唐よの古語にでも表現を譲るゆずより仕方はあるまい。

さて、山の祖神の老翁は、雲の帳に透く福慈岳の全積を、麓の方から目途を攀らして頂いただきへと計つて行つた。麓の道を横に辿たどつてその幅によりこれは只事でないと感じ取つた翁の胸には、福慈岳の高さに就ても、その心積もりに相当しんにゆうをかけたものを用意していた。翁はそれを目度めどに移して山の影を見上げて行つた。翁は息を胸に一ぱい吸い込み思い切り見上げたつもりでそこで眼を止めた。山の峯はまだそこで尽きようともせぬ。翁の息の方が

苦しくなった。翁はそこであらためて息を肺に吸い更え、もそつと上へ目度を運び上げて行つた。

また息の方が苦しくなったけれども山の高さは尽きようともしない。螺の腹でえび蔓の背をした老いの身体は後の丘の芝にいまや倒れるばかりに仰向いて天空を見上ぐるのであつた。

それかあらぬか、翁は天宙から頭上へ目^{まびさし}庇のように覆い冠つて来る塩尻の形の巨きな影を認めたかに感じた。そのときもはや翁の用意していた福慈岳に対する高さの心積りはあまりの見込み違いに切つて数段に飛ばし散らされていた。翁は身体を丘の芝に上から掴み押えられた窮屈な形を強いて保ちながら愕き以上のものに弄^{なぶ}られている。翁に僅に残っている頭の働きはこういうこと

を考えている。これが同じ地上に在つて眺めらるものの姿であるのか。この仰ぎ見る天空の頂は麓の土とどういふ關係に在るのか。麓はよし地上の山にしろ、頂はそれに何の縁もない雲に代つて空から湧くまた一つの氣體の別山なのではあるまいか。南の海の※螺ごうらが吐くという蜃気が描き出す幻山のたぐいではあるまいか。幻山を証拠立てるよう塩尻がたの尖から何やら煙のようなものくすぶの燻り出るのが見えるようでもある。

薄れ明るむ雲の垂れ幕とたそがれる宵闇の力とあらがう氣象の摩擦から福慈岳の巨体は、巨体さながらに雲の帳の表にうつすり浮出で、または帳の奥に潜つて見えたりする。何といふ大きな乾け坤こんの動きであろう。しかも音もなく。呆れた夢に痺しびれさせられ

かけていた翁の心は一種の怯えを感じるとぶるりと身慄いをした。翁の頭の働きはやや現実よみがえに蘇よみがえつて来る。

翁は西国に於て、山ちよう山により自然と人間のことはほとんど学び尽し、性情にもあらゆる豊さを加えたつもりでいた。また永い歲月かかつて体験から築き上げた考えと覚悟はもはや何物を持つて来ても壊せず揺ぎないものと思つていた。ところがいま、模索した程度に過ぎないものの、福慈岳の存在に出遇つてみると、それ等のものは一時にけし飛び、自分なるものを穴に横匍う蘆間の蟹のように畸形にも卑小に、また、経めぐつて来た永い歲月を元へ投げ戻されてただ無力のがいじ一孩がいじ児じとにしか感じられない。

「これは何ということだ。上には上があるものだ」

翁は人の世の言葉ではじめてこういった。物の絶大の量と絶大の積は説明なくしてそれが一つの力強い思想として影響するものであることを翁は悟らせられた。

「負けたよ」

翁はこうもいった。

山と山神とは性格も容貌も二つに分つべからざる関係を持つことは翁が西国の諸山に間配って諸山の山神に仕立てた自分の子供たちによつて知れるところのものである。この山の岳神となつたわが娘福慈神の性格が果してこの山の如くならば、自分がこの娘に対して抱く考えも気持もまるで見当外れである。およそ^{けた}桁が違つていよう。そしてまた西国の諸山と諸山に間配つた自分の子ど

もたちの性格はおよそ山の祖神自身の性格の中に在るものであり、たとえ無かつたものにしろそれは新に嚙み入れて自分の性格の複雑さを増し得た程度の積量のものであつた。それゆえ自分はかれ等を分身と思ひ做され、総ての上に臨んで自分は山の祖神であつたのだが、いまこの山の娘の神に向つてはまるでそういうこともそうすることもおぼつか覚束なくも思われる。

「この山は嚙み切れない。もしもそうしたなら、自分の性格の腹の皮の方が裂けよう」

翁はいまにもそれを恐れるように大事そうに螺の如き自分の腹を撫でた。

夕風が一流れ互つた。新しい稲の香がする。祭の神楽の音は今

将まさに 劉りゅう 唳りょう と 闌たけなわ である。

翁が呆然眺め上げる福慈岳の山影は天地の闇を自分に一ぱいに吸込んで、天地大に山影は成り切った。そう見られる黝くろずみ方で山は天地を一体の夜色に均ならされた。打縁流うちよする、駿河能国の暮景はかくも雄大であつた。

神の道しるべの庭のかがり火は精氣を増して燃えさかっている。山の祖神の翁は、泣いていいか笑つていいか判らない気持ちにされながら、かがり火越しに幄舎あくしやの方を観る。

わが子でありながら超越へだたの距つりが感じられる福慈の神は、白の祭装で、しもとづくえ 机もとりに百取つくえしろの机つ代えを載せたものを捧げ、運び

行くのが見える。

長なす黒髪を項うなじの中から分けて豊かに垂れ下げ、輪廓の正しい横顔は、無限なるものを想うのみ、邪よこしまなる想いなしといい放ったきようけつ皎きようけつ潔な表情を保ちながら、しら雲の岫くきを出づる徐おもむろなる静けさで横に移って行く。清らかな齋いっきの衣は、鶴の羽づくろいしながら泉を渡るに似て爽かにも厳おごそかである。

蛍光のような幽美な光りが女神の身体から照り放たれ、その光りの輪廓は女神の身体が進め闇に取り残され、取残されては急いで、進む女神の身体に追い戻る。

常陸ひたちの国の天羽槌雄神が作った倭文布しずりの帯だけが、ちらりと女神の腰に艶なる人界の色あやどを彩る。

翁はわが子ながら神々しくも美しいと見て取るうち、女神の姿は過ぎた。

娘の神が捧げて過ぎた机代のものの中で、平手に盛った宇流志禰ねの白い色、本陀理ほだりに入れたにいしぼりの高い匂いが、自分に絶望しかけて凡欲の心に還りつつある翁の眼や鼻から餓えた腸にかぐわしく染みた。

翁はから火を見ながらかさかさ乾いて亀縮かじかむ掌を摩り合わせて「娘が子というものは」と考えた。

「手頃の育て方をして置くものだ」と、これは口に出していった。

「あの娘は、あまり偉くなりすぎたよ」

口惜しさと悔いがぎざぎざと胸を噛んだ。

「あれじゃ、まるで取り付くしまもありはしない」

ふと、翁にふる郷の西国の山と山神が懐しまれた。あれ等のものにはつんもりとした、ちようど愛の掌で撫で廻される手頃なものがある。それ等の山には背があれば必ず山隈や谷があつた。そのようにこどもの山神たちにも秀でた性格の傍、叱りたしなめはするがそれによつてまた憐れみがかかり懐き寄せられもする欠点なるものがあるのだつたが。

この山の娘にはそれが無い。美しく偉いだけで親さえ親しめる隙が無さそうである。

「この娘を東国へ旅人の手に托^{かず}けて送つたときの氣持に戻つて、

いつそ、この娘を思い捨てるか。それにしてはこれだけになったものを、あまりに惜しい気もする。第一、山神の眷属の中からこれ程の女神を出したことは、山の祖神としていかなる気持の犠牲を払っても光栄とすべきではないか」

そう思うまた下から、親ごころの無条件な気持でもつて「娘よ」と呼びかけても、かの女の雪膚の如き玲瓏れいろうな性情に於て対象に立ち完全そのものの張り切り方で立ち向われて来るときの、こなたの恥さえ覚えるばかりの手持無沙汰を想像するとき、やはり到底、親子としては交際つきあい兼ねる女なのではあるまいかと、懸念がすぐ起つて来るのもあつた。

とつおいつ思いあぐねるうち、いよいよ無力の孩がいじ児としての感

じを自分に深めて来た老翁は、いまは何もかもかなぐり捨て、ひたすら娘にすが縋り付き度くなつた。それは福慈神に向つて娘としてよりも母らしいものへの寄する情に近かつた。偉れて立優つてゐるこの女神に対しこの流れの方向の感情に心を任せるとき、却つて気持は自然に近いことを老翁は発見した。

女神が捧げものを徹して持ち帰る姿が望まれた。

翁は堪られなくなつて声をかけた。

「娘よ。福慈神よ」

それは始めから哀訴の声音だつた。

女神の片眉が潜められたが声は美しく徹つてゐた。

「あら、まだ、そこにいらつしやいますの。お寒いのに、なぜ、

おとり申上げた村里の宿へお出でになりませんの」

翁は頑是がんぜない子供が、てれながら駄々を捏ねるように、掌に拳を突き当てつつ俯うつむ向き勝ちにいった。

「寂しいんだよ」

「では、どうして差上げたらよろしいのでございましょう」

「どんな端っこでもいい、おまえの家へ泊めとくれよ」

翁の声は小さかったが強訴の響は籠っていた。「おまえの居ると同じ屋の棟の下にいれば気が済むのだから、決して祭りの邪魔はしないのだから」

「それが、おさせ申上られないことは、お出でにすぐ申上げたでございませんか。無理を仰おっしやっては困りますわ」

娘の声は美しく徹ったまま、山が頂より麓へ土を揺り据えたように、どっしりとした重味が添わって来た。その氣勢に圧せられた翁は、却ってあらがう気持を二つ弾のような言葉で、あと先立って続けに女神へ向けて放った。

「情のこわい女だぞ」「何をまだ、この上、親を断つても修業の祭をしようというのだ。いやさ、これほど出来上った山やおまえに何の力や性格を増し加えようというのだ、慾張り」

女神は、しばらく黙って父の翁のいう言葉の意味の在所を突き止めていたが、やがて溜息をついたのち、静にいった。

「結局、おとうさまは、山の祖神の癖にこの福慈神だけはお知りになっていないことに帰着いたしますわね。よろしゅうございま

す、暁の祭までにはまだ間の時刻もございます。お話いたしまし
よう」

といつて、ちよつと美しく目を瞑り考えを纏めてまといるようだつ
たが、こう語り出した。

「おとうさま、この福慈岳は火を背骨に岩を肋骨ろっこつに、砂を肉に
附けていて少しの間も苦惱と美しさと成長の働をば休めない大修
業底の山なのでございますわ。見損じて下さいますな」

雨気が除かれたかして星が中天に燦めきらき出した。天空より以下
巨大な三角形の影をもちて空間を阻み星が燦めきあえぬ部分こそ
夜眠の福慈岳の姿である。頂の煙のみ覚めてその舌尖は淡く星の
数十粒を舐ねつぶている。

「わたくしが」

と福慈の女神は静に言葉をついだ。女神の顔は氷花のように燦めき、自然のみが持つ救いのない非情と、奥底知れない泰らかさが、女神の身体から狭霧のようにくゆり出す。

岳神が変貌して、そしてこういうふうに言い出すとき、その「わたくし」は、最早岳神みずからのことを指すのではなかった。岳神が冥合しているところの山そのものを岳神の上で語らしめるその「わたくし」であった。

山の祖神はさすがに、それとすぐ感じ取り、啓示を聴く敬虔な態度で、両の掌を組み合せ、かがりび篝火越しに聴こうとする。組ん

だ指の一二本だけ、組み堅め方を緩めて、ひよくひよく蠢めかしているのは、娘が何を言い出すことやらと、まだ、親振った軽蔑の念と好奇心と混ったものを山の祖神がいささか心に蓄えていることの現れと見れば見られる。

「わたくしが、わたくし自身を知ったということの誇らしさ、また、辛さ。それを何とお話したらよいでございましょう。判つて頂ける言葉に苦しみます。ここでは、ただそれが、いのちを張り裂くほどの想いのもので……而かも、たとえ、いのちが張り裂けようとして、心は狂いも、得死ぬことすら許されず、窮極の緊張の正気が続けさせられるという気持のものであるというぐらいしか申上げられないのを残念に思います」

と言つて、女神は、ここで溜息を一つした、白い息が夜氣に淡くにじんだ。

「わたくしが、物ごころついた時分からでも、この大地の上に、四たびほど、それはそれは永く冷たい歲月と、永く暖かい歲月が、代る代る見舞うたのであります」

冷たい時期の間は、鈍く寒い^{おそ}大氣の中に、ありとあらゆるものは、端という端、尖という尖から、氷柱^{つらら}を涙のように垂らして黙り込んでいた。暖かい時期の間は、このわたりの林の中にもまめ桜が四季を通して咲き続け、三光鳥のギーツギーツという地鳴き一年じゆう絶間なかつた。

「そして只今、この大地は、四度目に来た冷たい時期の、そのまた

中に幾たてもこまかく冷温のきざみのある、ちようどその二つ目の寒さの峠を下り降つた根方の陽気の続いている時期にあるのでございます」

まめ桜はひと年の五月に一度咲き、同じその頃、三光鳥はこの裾野の麓へ来て鳴く。生けるものにはここしばらく住み具合のよい釣合いのとれた時期の続きであるだろう。

「この大地は、島山になっております。蜻蛉あきつの形をしたこの島山の胴のまん中に、岩と岩との幅広い断きれ目の溝があつて、そのあいから、わたくしは生い立たせられつつあるのを見出したのでした」

西の海を越えて、うねって来た二つの大きな山の脈系、それは

島山の胴の裂け目を界にして南北に分けられる。そのおのおのは、内側のものと外側のものとの脈帯の襞が違っている。それすら、複雑蟠纏を極めているのに、下より突き上げ上から展し重なるよう、十一の火山脈が縦横に走る。

かくて、この島山は、潮の海から蜻蛉型に島山の肩を出すことが出来たのであった。重ね重ねの母胎の苦勞である。その上、重く堅い巖を火の力により劈き、山形にわたくしを積み上げさせたということとは、仇おろそかのすさびに出来る仕事ではない。非情の自然が、自らその頑な固定性に飽いて、抗い出た自己嫌悪の旗印か、または非生の自然に却って生けるものより以上の意志があつて、それを生けるものに告げようとする必死の象徴でもある

のであろうか。

あるべきもののある理由は、そのものになり切ったものにしてはじめてうなずけるほど、深刻なものであるのであつた。山一つさえその通り――

「まだそのときのわたくしは、きしやな細火を背骨にし、べよべよしな撓るほどの溶岩を一重の肋骨として周りに持ち、島山の中央の断れ目から島地の上へ平たく膨れ上つただけの山でした」

世の中は、ただうとうとと、あま葛の甘さに感じられた。ただひとりほつちが寂しかった。

幼い青春が見舞つた。「わたり環境」と「た誰」を感じた。突き上げて来た物恋うこころ。自らによつて他を焼き度く希う情熱をはじめ

て自分は感じた。

自分は眩暈めまいがして裂けた。息を吹き返して気が付いたときに、自分は見る影もない姿に壊れていた。胸から噴き流れて凝った血が、岩となって二枚目の肋骨としてまわりに張っていた。

自分は泣く泣く砂礫を拾って、裸骨へ根気よく肉と皮を覆うた。しばらく、爽かで湛えた気持の世の中が見廻わせた。自分は第二の青春を感じた。

同じく物恋うるころ、それには、「疑い」と「恥かしさ」が、厚い殻となって冠っていた。それをしも押しつけて、自らによって他を焼き尽そう情熱、自分はまたしても眩暈めまいがした。裂けた。息を吹き返して気が付いたときに、自分は醜い姿に壊れていた。

けれども自分の胸から噴き流れて凝った血は、三枚目の肋骨となつて、まわりに張っていた。自分は泣く泣く砂礫を拾つて裸骨へ根気よく砂礫の肉と皮を覆つた。

しばらく、物憂^うく、嫉^ねたく、しかも陽気な世の中が自分に見え^{まみ}た。自分は娯しい中に胸迫るものを感じ続けて来た。

第三の青春を感じた。

同じく物恋うるころに変りはないけれども、自分はそれにも増して、「知る」ということの惧^{おそ}ろしさとうれしさを始めて感じ出した。これほどに壊れても裂けても、また立上つて来る自分。蘇つては必死に美しさに盛返そうとするちから。これは一体何だろう。他と競いごころを起すこの自分は一体何だろう。自分を自

分から離して、冷やかに眺めて捌き、深く自省に喰い入る痛痒いたがゆい錐揉みのような火の働き、その火の働きの尖は、物恋うるほど内へ内へと執拗しつこく焼き入れて行き、絶望と希望とが膜一重となつてゐる胸の底に触れたと思つたとき、自分はまた裂けた。蘇つて壊れた自分を観ると、そこにはまた第四の肋骨が出来上つていた。自分はそれに砂礫の肉と皮をつけた。

しばらく、明暗が渦雲のように取り組む世の中に眺められる。自分を剖き分けて、近くへ寄つてみれば、焼石、焼灰の醜い心と身体、それは自分ながら吐き捨ててしまひ度いようである。けれども、やっと取り纏めて、離れて眺めみれば、芙蓉のように美しく、「誰」を魅する力があるもののものである。それにつれて、

希望のぞみという虹がうつらうつら夢みられて来る。

美しくも力強い希望のぞみ。だが果して、その希望を實現し得られる力が自分の中にあるのだろうか。その力としてありそうに思える火の背梁だけは確に逞しくなっている。

しかしまたこの大きな虹のような希望を捉えようと考え出したことがおおそれた想いのようでもあり、身体に激しい慄えが来る。かくてまたもや自分は裂けた。

「わたくしは只今、最初から数えて八枚目の肋骨まで出来ております。わたくしの身体の根は、この島山の北の海岸にひき、また南は遠い南の海の硫黄を吐く島までひいています。わたくしの身体の続きの上で同じく火を吐く幾つかの眷属。この島山に小さい

ながらも姿は等しい三十余の山々。それ等はみなわたくしを母のようにしております。わたくしに較ぶ山はございません。わたくしは確かに選ばれたという自覚を今更どう取り消しようもございません。それにつれて、幼ない競い心も除かれました。選ばれたということの孤独の寂しさ、また晴れがましき、責任の重苦しさと権利の娛しき。

ですが、折角ここまで育ち上ったものに、またもや成長の破壊が来て、これからさき何度も死ぬような思いをするのはまだしものこと、女の身として、一度々々の醜さになるのを自分の眼でまざまざと見なければならぬということ、考えてもぞつといたしますわ」

可哀そうに唾おしのような自然、それでいて、意志だけは持つてい
る。その意志を人によつて表現したがっている。一体、人という
ものはなま懶けもので、こらく小楽をしたがる性分である。驚異を与えない
では動かない。この島山に住む人は、山のわたくし同様、驚異で
いのちに傷目をつけられ、美しさにいのちの芽を牽出され、苦悩
に扱しごかれて、希望へと伸び上がらせられなければならない。

「わたくしは、それを人に伝えるために選ばれました。

父よ。あなたが、山の神の眷属としてわたくしを、ただ眷属中
での褒められ者として育つのを望んだ娘は、この福慈岳に籠れる
選ばれた偉大ないのちの中にな緬い込められ、いまや天地大とも久
遠劫来のものとなつてしまいました。いまや娘はあなたの望まれ

る程度に程良くなることも、娘子として可愛らしくあることも出来ません。それはどんなにか悲しいことでしょうが、運命です。

仕方ありません。おとうさま、あなたはもう一度娘を東国へ思い捨てた気持になって、わたくしを思い捨てて下さい。さあ、暁が白みかけました。わたくしは、暁の祭りにいそしまねばなりません。早く、取って差上げた村の宿屋へおいでになって、お寝よして下さいまし。いつでもそうしておいででは身体にお毒ですわ。あしたは、もっとゆつくり、これに就てのお話も出来ましようから」

「わしや、偉大なものへ生命を賭けることは大好きなのじゃよ。わしは最愛のこどもでそれをした。その愛別離苦の悲しみや壮烈な想いで、わしの腸はこんなに螺の貝のように捻じ巻いたのじゃ

ないか」と山の祖神の翁は負けん気の声を振り立てていった。

「だが、親子の縁は切り度くないもんじやよ」

とその言葉の下から縫い声で寄り戻した。

「あなたは生みの親、わたくしのいのちの親は、このあめつちと、この島山の人々。もはやあなたとわたくしを継ぐとか切るとかいふせきは放れております」と女神は淡々としていった。

「あなたが、わたくしを思い捨てなさるほど、わたくしはあなたに親しい愛娘になりました。その反対に、あなたが一筋でも低い肉親の血をわたくしにおつなぎのつもりがあつたら、それは却つてわたくしから遠ざかりなことになるのです。お判りになりませんか」

「わしが、おまえを東国へ思い捨てた歳からいま娘になるまでの歳月を数えてみるのに、いくら山の神々の歳月は人間の歳月と違うにしろ、数えて額たかが知れている。それを何十万年何百万年の生い立ちの話をするなんて、あんまり親をばかにし過ぎるぞ。……いくらこの山の座り幅が広いたって、三国か四国に互っているに過ぎまい。それを海山遠く取入れた話をするなんて、あんまり大袈裟おげさだぞ。女の癖に」

山の祖神のこういうたしなめ方に対し福慈の女神はもう何ともいわなかった。

「おい、娘、何とかいわんかい」

と催促されてもうそ寒そうに袖の中に手を入れ合して立ってい

るだけだった。

山の祖神は

「こいつ氷のように冷たいおなごじやねえ」

といった。

「よし、きさまがそういう料りょうけん簡なら、こつちにもこつちの料

簡がある」

といい放った。

山の祖神の翁に、むせかえ噎返るような怒りと愛惜の念、また、不如

意の口惜しさ、老いて取残されるものの寂しさがこもこも胸に突き上げて来た。

翁はじつとしていられなくなつて廻された独楽こまのように身体の

しん棒で立上った。娘をはたつと睨み、焦げつく声でいった。

「よし、こうなったら、やぶれかぶれ。おれはきさまを誣のろつてやる。金輪際こんりんざいまで誣のろつてやる。今更、この期になつてびくつくまいぞ」

娘の冴えまさる美しい顔を見ると、その毒心もつい鈍るので翁は眼を娘から外らしながら声を身体中から振り絞るべく、身体を揉み揺り地団じだんだ太踏みながら叫んだ。

「福慈の山、福慈の神、おまえは冷たい。骨の髄に浸みるまで冷たい。えい、冷たいままで勝手におれ、年がら年中冷たい雪を冠つておるのがいいのさ。草木も懐かぬ裸山でおれ。凍るものから、餌食を見出して来やがれ」

ぺっぺっぺつと唾を三度、庭に吐き去りかけたが、ふとそこに落ちていた小石の一つを拾って手早く懐に納め、

「ざまを見よ。やあいやあい」

と行って出て行つた。

この山の祖神の福慈の神に対する呪詛の言葉を常陸風土記では、
汝所居山、生涯之極、冬夏雪霜、冷寒重襲、人民不登、飲食勿
奠者

という文字で叙している。またこれにより富士は常に白雪を頂き、寒巖の裸山になったのだ、と古常陸地方の伝説は構成している。

東国へ思い捨てたこどもに邂逅めぐりあう望みを、姉の福慈岳の女神に失望した山の祖神は、せめて弟に望みを果し度いものだと、なおも東の方を志して尋ね歩るき出した。姉に訊いたら、あるいは消息を知ったかも知れないが、薄情を怒るどさくさ紛れに、つい訊くのを忘れたのを今更残念に思うものの、取って返して訊き直すこともならない。山の祖神の翁は行き合う人に訊ねることを唯一の手がかりにしてひたすら東の方にある山を望んで足を運ばせた。

行糧の料はすでに尽き、衣類、履ものも旅の責苦に破れ損じた。この身なりで物乞うては餓を満たして行く旅の翁を誰も親切には教えて呉れなかった。

足柄の真間の小菅を踏み、箱根の嶺ねろのにこ草をなつかしみ寝て相模さがみへ出た。白波の立つ伊豆の海が見ゆる。相模嶺ねの小嶺おみねを見過し、真砂な為す余綾よろぎの浜を通り、岩崩いわくえのかけを行く。

東の国へ行くには二手の道があつた。一つは山寄りの道を辿ると、一つは海を越えて廻つて行く道とであつた。

山寄りの道を行く方が山の岳神を探すに便利は多いようなものの、それ等の山は多く未開の山で、ちよつと人に訊いただけでも、山の主は、百足むかでであるとか、猿であるとか、鷲であるとか、氣の利いた山の神ではなかつた。これでは訪ねずとも判っている。翁は身に疲れも出たことなり、漸く舟人に頼み込み、舟の隅に乗せて貰つて浪路を辿つた。

海路は相模国三浦半島から、今の東京湾頭を横断して房総半島の湊へ渡るのが船筋だった。

土地不案内に加えて、右往左往した上、乗った船もここにはやてを除け、かしこに風ぎを待つという進み方なので山の祖神の翁の上に人間の歳月の半年以上は早くも経ってしまった。

夏なつそ麻挽く、海うみかみがた上瀉うみかみがたの、沖つ州とどに、船は停とどめむ、さ夜更けにけり。

しとしとと来た雨の夜泊の船中で、寝いねがてた苦とまの雫の音を聞いていると翁の胸はしきりに傷んだ。翁は拾とつて来た娘の家の庭の小石を懐から取出して船燈のかけで検めみる。普通の石とは違っている。

すべすべして赤く染つた細長く固い石である。頭と尾は細く胴は張つている。背及び腹に鱗えらのようなものが附いている。魚の形と見られぬこともないが、より多く涙が結晶した形と見る方が生きて眼に映る石の形であつた。それは福慈岳が噴き出した火山弾の一つであるのだつた。

「娘が變つてゐるだけに、庭の小石も變つていら」

翁はそういつて、なおも燈のかけで小石を捻つていた。

傷むところに、きらりと白銀の丸のような光りが刺した。

「おれはいま娘の涙を手で弄んでゐるのではあるまいか」

すると、娘がいつたことであのときは不服のあまり胸に受けつけなかつた意味のことが、まざまざと暗んじ返されてくるのだ

った。

「庭の小石まで涙の形になってやがる。ひどい苦労は確にしたのだな」

それに凝りずに、娘はなおも苦労を迎えてそれを支えた成長の肋骨を増やす積りでいる。凍るほど冷く感じられたおんなだったが、執拗しつこく逞しく激しい火の性を籠かごらしている。その現れのようにこの涙型の石が血の色に赤く染っていることよ。石が尾鰭まで生やして、魚になっても生き上らんいのちの執拗さを示している。娘が何度も青春を迎えるといった言葉が思い出される。

翁は掌の上に載せた火山弾にだんだん切ない重みを感じながら、その娘に対し氷にもなれというような呪詛をかけたことのおよそ

見当違いでもあり、無慈悲な仕打ちであることが悔まれた。

今頃、娘はどうしているだろう。福慈岳には夏に入るので白雪でも頂いていやしないか知らん。

翁はすごすごと小石をまた懐へ入れた。苦に当る雨音を聞きながら一夜を寝苦しく船中に明した。

房総半島に上り、翁は再び望多うまぐさの峰ねろの笹葉の露を分け進む身みとなつた。葛飾かつしかの真間の磯辺おすひから、武蔵野の小岫ぐきがほとり、入間路いりまじの大家が原、埼玉さいたまの津、廻つて常陸の国に入った。

筑波嶺ねに、雪かも降らる、否諾いなをかも、愛かなしき児等が、布乾にぬほさるかも

山の祖神は、平地に禿立とくりつしている紫色の山を望み、それは筑波という山であつて、それには人身の形をした山神が住んでいることを聞き知つた。

その山は全山が森林で掩われて鬱蒼としていた。麓の方は檜かしの林であり、中腹へかかるとそれが樅もみの林に代る。頂に近いところは山毛櫟ぶなとなつた。山の祖おやのかみ神の翁はまだ山に近付かないさきから山の林種はこれ等で装われていることを、陽ひに映はゆる山緑の色調で見て取つた。この様子の山なら草木の種類はまだ他にたくさん宿つている筈だ。

「豊かな山だな」

翁は手を翳してほほ笑んだ。

山の頂は二つに岐れていた。尋常な円錐形の峯に対し、やや繊か細く鋭い峯が配置よく並び立っている。この方は背丈は他より抽んでているが翁には女性的に感じられる。翁はこの山には人身の岳神が住み守ると聞いたが、それにしたら、その岳神は結婚していて、恐らくその妻は良人より年長のいわゆる姉女房であるであらうと山占いをした。

東国の北部の平野は広がった。茅草ちがや・尾花の布なびき靡く草の海の上に、櫟なら・榛はりの雑木林が長濤のようにうち冠かぶさっていた。榛の木は房玉のような青い実をつけかけ、風が吹くと触れ合つてかすかな音を立てた。丸く見渡せる晴れ空をしら雲が一日じゅうゆるく

瓦わたつて過ぎた。

その山は北の方から南へ向けて走る大きな山脈の、脈端には違
いないのだが、繋がる脈絡の山系はあまりに低いので、広い野に
突とつとく禿もたとして擡もたげ出された独立の山塊にしか見えない。母体の山
脈は、あとに退き、うすれ日に透け、またはむれ雲の間から薔薇
色に山やまひだ襞ひだを刻んで展望図の背景を護っていた。

平野のどこからも眺められるその山は、朝は藍に、昼はよもぎ
色に、夕は紫に色を変えた。山の祖神の翁は、夕の紫の山をいち
ばん愛した。

翁が、草の茵しとねに座すわつて、しずかにその暮山を眺めやるとき、山
のむらさきから、事実、ほのかで甘く、人に懐き寄る堇の花の匂

いを翁の嗅覚は感じた。

翁は眼を細めて

「山近し、山近し」

と呟いた。

その言葉は、翁が福慈神に近付くとき胸に叫んだと同じ言葉ではあるが、翁はただ呟いただけで山に急ぐころは無かった。その山は急いで近寄らなければ様子が判らないというような山容ではなかった。離れて眺めているだけでも懐しみは通う山の姿、色合いだった。むしろ近付いたら却って興奮めのしそうな懸念もある遠見のよさそうな媚態びたいがこの山には少しあつた。

広野の中に刀禰とねの大河が流れていた。薦こも、水葱なぎぎに根を護られな

がら、昼は咲き夜は恋こいする宿という合ねむ歡の花の木が岸に並んで生えている。翁はこの茂みの下にしばらく憩つて、疲れを癒やして行くかと思つた。何に疲れたのか。もちろん旅の疲れもある。しかしもつと大きいのは娘に対する疲れであつた。

福慈岳で女神の娘と訣れてから旅の中にすでに半歳以上は過ぎた。訣れは憤りと呪いを置土産にいで立つたものの、渡海の夜船の雨泊中に娘の家の庭から拾つて来た福慈岳の火山弾を取出してみ、それが涙痕の形をしており、魚の形をしており、また血の色をしているところから福慈岳神としての娘の苦勞を察し、決意のほどもほうかがぼうかが覗うかがえた。それにつれて一時それなりに呵かし去れたと思えた娘の主張が再び心情を襲うて来て、手脚の患かい以上に翁を

疲らすのであった。

娘のいったことは自然の意志としたならあまりに生きて情熱に過ぎてゐる。もちろん人間の考えだけであれだけの超越の霜は帯ばれない。娘はいのちということをつたがそれは自然と人間を合せて中から核心を取出したそのものをいうのであろうか。翁は今までの生涯に生きとし生けるものの逃れず考えることは生活と幸福と生死ということであると思つてゐた。そしてこれ等のことは人間が山に冥通する力を得て二つの山の岳神となり得たとき総ては解決されるとまた思つてゐた。山の生活、山の幸福、そこに何一つ充ち足らぬものがあるうか。命終せんとして雲に化し巖いわおに化す。そこに生死を解脱げだつして永世に存在を完うしようとする人

間根本の欲望さえ遂げ得られるのではないか。

それに引代え娘はいくたたびの生死を語り、その生死毎に苦惱と美への成長を語り、生活とも幸福ともいわない。強しいてそれらしいものを娘の言葉の中から捕捉するなら娘がいったいくたたびか迎える辛くも新鮮な青春、かくて遂つひに老ゆることを知らずして苦しくも無限に華やぎ光るいのち。娘にしたらこれをこう生活とも幸福ともいうのだろうか。おう！

山と人間を冥通するところの力に座して世に経るを岳神という。岳神も神には神である。だがこの程の生き方を望もうとも経られようとも思わぬ。

それは人界の理想というものに似ている。現実現実に遠く距るほど

理想である。しかもあの娘はその遠く距るものを現実うに享け生かそうとするものではなからうか。

娘は祭の儀を説いて神の中なる神に相逢うといった。

思えば思うほどひとり壁立ばんじん万仞の高さに挺身ていしんして行こうとする娘の健気けなげな姿が空中でまぼろしと浮び、娘の足搔あがく裳からはうら哀しい雫しずくが翁の胸したたに滴したたつて翁を苦しめた。

取り付きようもない娘の心にせめて親子の肉情を繋ぎ置き度い非情手段から、翁は呪のろいという逆手ぎやくてで娘の感情に自分らくいんを烙印らくいんしたのだったが、必要以上に娘を傷けねばよいが。

「どうしたらいいだろうなあ」

山の祖神の翁は螺の如き腹と、えび蔓のように曲がった身体を

岸の叢くさむらもたに靠せて、ぼんやりしていた。道々も至るところで富士の嶺は望まれたが見れば眼が刺されるようなので顧つてみなかった。岸の叢の中には、それを着ものの紐ひもにつけると物を忘れることができるという萱草わすれぐさも生えていたが、翁はそれも摘まなかつた。せめて悩んでいてやることが娘に対する理解の端くれになりそうに思えた。

前には刀禰とねの大河が溶漾ようようと流れていた。上つ瀬には桜皮かにわの舟おがいに小楫おがいを操り、藻臥もふじの束鮒つかふなを漁ろうと、狭手さで網さしわたしている。下つ瀬には網代人あじろが州の小屋こもに籠つて網代すずきに鱸かのかかるのを待っている。

翁はときどき、ひよんなところで、ひよんな憩い方をしている

と、苦笑して悩みつつある一人ぼっちの自分を見出すのであったが、なかなか腰は上げ悪かった。

東国のこのわたりの人は言葉や気は荒かったが、根は親切だった。餓えて憩っている老翁のために魚鳥の獲ものの剩ったのを持って来て呉れたり、菱の実や、黒慈姑えぐを持って来て呉れたりした。雨露を凌ぐ菰こもの小屋さえ建てて呉れた。

昼は咲き夜は恋こいする宿という合歡の木の花も散ってしまった。翁は寂しくなった。翁がこの木の下にしばし疲れを安めるために憩うたのは、一つは、葉の茂みの軟かさにもあるのだろうが一つは微紅色とときをした房花に、少女として自分の膝元に育て上げていた時分の福慈の女神の可憐な瞳の面かげを見出していたのではあるま

いか。ぱつと開いてしかも煙れるような女神の少女時代の瞳を、翁は娘の成長に伴う親の悩みに悩まされるほど想い懐しまれて来るのだった。

刀禰とねの流れは銀色を帯び、渡つて来た、秋鳥も瀬もの面に浮ぶようになつた。筑波山の夕紫はあかあかとした落日にたくらく謫落の紅を増して来た。稲の花の匂いがする。

「山近し、山近し」

山の祖神の翁は今は使い古るしになつてこの言葉を呟いた。そしてやおら立上つた。その山は確に葉守はもりの神もいそしみ護る豊饒な山に違いない。そしてまた、そこに鎮まる岳神も、嘗かつて姉の福慈の女神と共に、東国へ思い捨てたわが末の息子が成長したも

のであろうという予感しみしみは沁々とある。それでいてなお急ぐころは湧き出でない。

河口に湖のようになって入江の秋水に影をひた浸すその山の紫をもう一度眺め澄してから翁は山に近付いて行った。

山麓ふもとの端山の千木ちぎたかしる家へ山の祖神の翁は岳神を訪ねた。

一年は過ぎたが不思議とその日は翁が福慈岳の女神を訪ねたと同じ頃で、この辺の新粟を嘗むる祭の日であった。岳神の家は幄あ舎くしゃに宛てられていた。神楽かぐらの音が聞えて来る。

山の祖神の予感に違わず、この筑波の岳神は、自分の息子の末の弟だった。

しかし息子は、父親の神の遙々の訪れをそれと知るや、直ちに翁を家の中へ導き入れ、ひきあわ紹介させたその妻もろとも下へも置かない歓待に取りかかった。そうしながら祭の儀も如じよさい才なく勤めた。その妻は翁の山占い通り、いささか良人より年長で良人の岳神を引廻し気味だった。彼女はいった。

「ふだん、どんなにか、お父上のことを二人して語り暮らしておりましたことでしょう。有難いことですわ。これで親孝行をさして頂きますわ」

家の中のいちばんよい部屋を翁のために設けて呉れた。この山なに生るものの肥えて豊かなさまは部屋の中を見廻しただけでも翁にはすぐそれと知れた。

黒木の柱、梁、また壁板の美事さ、結んでゐる葛蔓の逞しき、
簀すのこ子の竹材の肉の厚さ、翁は見ただけでも目を悦ばした。敷もの
の獣の皮の毛は厚く柔かだつた。

壁の一侧に しもとづくえ 机を置き、たかつき皿や高坏に、果ものや、乾肉が
くさぐさに盛れてある。一甕の酒も備えてある。

狩の慰みにもと長押ながしに丸木弓と胡やなくい籙が用意されてあつた。

息子の夫妻は朝夕の間候を怠らず、食事どきの食事はいつも饗
宴のような手厚さであつた。

息子夫妻のそつちの無い歓待振りにはまことに十二分の親孝行に違
いなかつた。普通にいえばこれで満足すべきであらう。だが父の
祖神の翁には物足りないものがあつた。

息子夫妻が父の祖神の翁に顔を合すとき、大体話は山の生産の模様、山民の生活の状況、それ等を統たばねて行く岳神としての支配の有様、そのようなものであった。それは誰が聴いても円満で見上げたものであった。山民間に起った面白そうな出来事を噂話のように喋つても呉れた。だが、それだけだった。

親子関係を離れて誰に向つても話せる筋合いの事柄ばかりである。折角、親子がたまにめぐり合うのは、もつと心情に食い込んだ、親子でなければできないという気持の話はないものか。人知れない苦勞というものが息子の岳神にはないのか、囁いて力付けて貰つたり、慰めて貰つたりしたい秘密性の話はないのか。

気を付けてみるのに、息子の岳神のこの公的な円満性は、妻に

対してでもそうであつた。

夫妻は睦むつまじくて仲が良い。良人を引廻し気味に見える才女の姉女房も、良人を立てるところには立派に立てた。岳神の家としての事務の経営は少しの渋滞もなく夫妻共に呼吸は合っている。それでいて何となく夫妻の間に味がない、お人良しでしかも根がしっかり者の良人の岳神が少しにやにやしなから、

「働けそうな女なので、共稼ぎにはいいと思ひましてね、この奥地の八溝山やみぞの岳神の妹だったのを貰もらつて来ましたのです。これでも求婚の競争者が相当ございましてね」

という意味のようなことを話しかけると、妻は

「まあまあ、そんなお話、どうでもいいじゃございませんか」

「それよりかまだ山の中でおとうさまがお見残しのところもござい
ましよう。幸いよい天気でございますから、あなたご案内して差
上げたら」

と、とにかくに事物の歓待の方へ気を利かして行くのであった。

翁の方からは何もいい出せなかった。いい出せる義理合いでは
ないと翁は思っていた。すでに東国へ思い捨てた子である。それ
が自力でかかる豊饒な山の岳神ともなっていて呉れてるのだから
何もいうことはない。山の祖神としては、この分身によって自分
にも豊かさという性格を付け加え得られ、けんぞく眷属の繁栄を眼に見
ることである。感謝すべきだ。

姉娘に対してはとかく恋々たる山の祖神の翁も弟の岳神に対し

てはどういうものかこの点は諦めがよかつた。

ただ一言この弟の岳神の口から聞かして貰い度いのは姉娘の福慈岳の女神の批評だつた。翁はそれを聞いて、もし悪罵あくばの声でも放つて呉れるなら不思議に牽かれる娘の女神への恋々の情を薄めてでも貰えるようにさえ感ずるのだつた。

翁はここに於てはじめて姉娘に就いての口を切つた。

「来る道で、実は福慈岳へも寄つてみたよ」

弟の岳神は顔の色も動かさず

「それは何よりでございました。姉さんもお歡びでございましたでしょう」

「ところが生憎あいにくと祭の日だったのでね。泊めて貰うこともでき

なかつたよ」

翁はこういつて弟の岳神の顔を見た。弟は諾うなずいたが声はあつさりしていた。

「そりやお気の毒なことでございました。あちらはこちらと違つて諸事、厳しいところもございましょう」

翁は焦いらだつように訊いた。

「おまえ等は、福慈とは交際つきあっていないのかい」
すると弟の岳神は言訳らしく

「なにしろ自分の持山のことで忙しく、ついついご無沙汰をしております」

そのとき岳神の妻が傍から、ちよつと口を入れた。

「前にはお姉さまのところへも、ときどき伺ってみましたのですが、ああいうお偉い方のことですから、すぐこつちに話の接穂つきほが無くなってしまう場合も多く、それにああいうご勉強家のことですから、お邪魔しましても、何かお妨げするような気もいたしますので、つついご無沙汰勝ちになつてしまつたのでございますわ」

それからちよつと間を置き、

「ずいぶん、普通の女の子とは變つていらつしやいますわね」

その言葉につれて良人の岳神も

「どういふものか、あの人の前へ出ると、威圧される気がするところから、つい心にもない肩肘の張り方をしてしまう。どうも姉

弟ながらうち解けにくい」

と零こぼした。

山の祖神が息子夫妻から衷情を披瀝したらしい言葉を聴いたのは、この姉娘に対する非難めく口振りを通してだけだった。

山の祖神はこれを聴くと、息子夫妻と一しよになつて姉娘を非難したい気持などは微塵みじんもなくなつた。腹の中で、「この平凡な若夫婦に、何であの福慈の女神のことなどが判るものか」と想いながら、こういう言葉で姉娘に関する話は打切りにした。

「なに、あれで、なかなか女らしいところもあるんだよ」と。

この山は人間なが昵なじみ易い山だった。水無川みなを越えて山腹にかけ

山民の部落があつた。石も多いがしかしそれに生え越して瑞々みずみずと茂つた、赤松、樅もみ、山毛櫨ぶなの林間を抜けて峯と峯との間の鞍部に
出られた。そこはのびのびとして展望も利いた。

二つに分れている峯にはどちらにも登れた。岳神の息子夫妻の象徴のように一方は普通の峯かたちで、一方はいくらかきやしゃ纖細で鋭く丈たけも高かつた。山の祖神の老いの足でも登れた。

東の国の平野が目の下に望まれた。その岸に寝た刀禰の川水がうねうねと白く光つて通っている。河口の湖のような入江。それから外海の波が青く光っている。

西北の方には山群が望まれて、翁の心を沸き立たした。も少し自分の齡が若かつたらこどもをあれ等の岳神に送るのにと思わし

めた。山郡のところどころに高い山が見えた。煙りを噴いてる山も望まれる。遠く福慈岳が翁の眼に悲しく付き纏う^{まと}。

奇妙な形をしたいろいろの巨きな岩、滝——女体の峯から戻つて来る道には、そういう目の慰みになるものもあつた。虫を捉えて食べるといふ苔、実の頭から四つの羽の苞^{つと}が出ている寄生木^{やどりぎ}の草、こういうものも翁には珍らしかつた。

息子の岳神は暇な暇な、父の祖神を山中に案内して見せて廻るうち、ある日、山ふところの日当りの小竹原^{ささ}を通りかかり、そこに二坪近くの丸さに、小竹^{ささ}之葉^{がは}が剥げ、赤土が露^むき出ているのを見付けると、息子の岳神は指して笑いながらいった。

「猪が仔猪をつれて来て相撲^{すま}つて遊ぶところですよ」

赤土は何度か猪の蹄ひづめに蹴鋤ひづめかれたらしく、綿のように柔かに、ほかほか暖そうであつた。

「なるほど、この辺は人里離れて、猪の遊ぶのに持つて来いだ」
翁はそういつて、傍ほよの保与ほよ（寄生木）のついている山松を見上げた。その日は何心なくそれで過ぎた。

岳神の父親が滞在すると聞き付けて、配下の土民たちはところどころの産物を父の祖神に差上げて呉れと持つて来た。

加波山で猟れた鹿らしく鹿島の猟で採れた鮓あわび、新治にいばりの野で猟れた、嶋しぎ、那珂の川でとれたという、蜆しじみ貝がい。中にははるばる西北の山奥でとれたのをまた貫いに貫つて来たといつて、牟射むささ佐さ毗びという鳥だか、獣だか判らないものをお珍らしくらうと贈りに

来た。老衰を防ぐにはこれが第一だといって武奈岐むなぎを持って来て呉れるものもある。

夜の奥の綾むしろは暖く、結燈台の油坏つぎに油はなみなみとして
いる。

翁は衣食住の幸福ということも考えないではいられなかった。

それで常陸風土記ひたちふどきによると一応はこうも事祝ことほいでやった、

「人民集賀、飲食富豊、代々無絶、日々弥栄、千秋万歳、遊楽不窮」と。

しぐれ降る頃には、裳羽服もはきの津の上で少女男が行き集う歌垣が催された。

男列も、女列も、青褶あおひだの衣をつけ、紅の長紐を垂れて歌いつ

舞った。歌の終り目毎に袖を挙げて振った。それは翁の心に僅かに残っている若やぐものに触れた。

岳神の妻は、笑つて冗談のようにして、

「この中に、もし、お気に入りの娘でも見当りましたら、お身のまわりのお世話に侍かせましょう」

といつて呉れた。

しかし翁は寂しかった。

ある日、土民の一人が瓜うりわらべを拾つて持つて来て呉れた。それは猪の仔で、生れて六七月になる。筒形をしていて柔かい生毛の背筋に瓜のような豎縞が入っていた。それで瓜わらべと呼び慣わされていた。

「これはよいものを貰った。肉は親の猪より軟かでうまいものです」

息子の岳神はそういつて、父の祖神に食べさすように妻に命じた。

翁は、ういういしく不器用な形の獣の仔を見ると、何か心の喘ぎが止まるような気がした。とても殺して食べさせて貰う気など出なかつた。

「ちよつと待つて呉れ。これはそのままでわしが貰おう」

翁は、瓜わらべを抱えて戸外へ出た。瓜わらべはくねくね可憐な鳴声を立てて鼻面を翁の胸にこすりつけた。翁は何となく涙ぐんだ。

翁は螺の腹にえび蔓の背をした形で、瓜わらべを抱え、いつの間にか、いつぞや、息子の岳神に教えられた山ふところの猪の相撲場に来ていた。蹄で蹴鋤いた赤土はほかほかしている。

山の祖神は、あたりを見廻した。見ているものは保与ほよのついた山松ばかりだった。翁は相撲場の中へ入り瓜わらべを土の上へ抱き下した。

螺の腹にえび蔓の背の形をした老翁と、筒形の瓜わらべとは、猫が毬まりを弄ぶように、また、老牛が狼に食はまれるように、転びつ、倒れつ千態万状を尽して、戯れ狂った。初冬の風が吹いて満山の木が鳴った。翁は疲れ切つて満足した。瓜わらべにちよつと頬ずりして土に置いた。瓜わらべの和毛にしげから放つらしい松脂の匂いが

翁の鼻に残った。

翁はしばらく息を入れていた。瓜わらべは小竹の中へ逃げ込み
そうなので片手で押えた。

膝がしらがちくちく痛痒い。翁が検めみると獣の蝨だにが五六ぴき
禪はかまの上から取り付いていた。猪の相撲場の土には親猪が蝨を落し
て行つたのだつた。

「こいつ」

といつて翁は、膝頭の蝨を、宝玉を拾うように大事に、一粒ず
つ摘み取る。老いの残れる歯で噛み潰した。獣の血臭いにおいが
して翁の唇の端から血の色がうつすりにじんだ。満山の風がまた
互る。

翁にはもう何の心もなくなった。手を滑った瓜わらべは逃れて小竹の茂みに走り込んだ。代りに親猪の怒れる顔面を翁は保与ほよのついた山松の根方に見出した。

山の祖神の事である、山に棲めるほどのものを自由に操縦できないいわれはない。けれども、翁は、

「命終のとき」

といつて、従容とその親猪の牙にかけられて果てた。

初夏五月の頃、富士の嶺の雪が溶け始めるのに人間の形に穴があく部分がある。「富士の人型」といって駿南、駿西の農民は、ここに田園の営みを初める印とする。その人型は螺の腹をしえび

蔓の背をした山の祖神の翁の姿に、似ている。いやそれにやや獣の形を加えたようでもある。

ここにまた筑波の山中に、涙明神という社がある。本体には富士の火山弾が祭つてある。

山の祖おやのかみ神が没になるとまもなく子が無いことを託かこつていた筑波の岳神夫妻の間にこれをきっかけに男女五人ほどのこどもができた。

風の便りに聞けば、山の眷属の西国の諸山にも急にこどもの出生の数を増したという。

老いたるは、いのちを自然に還して、その肥田から若きものの

芽を芽出たしめるといふ。

生命の耕鋤順環の理が信ぜられた。

水無瀬女は、豊かな山に生れ、しかも最初に生れた総領娘なので、充分な手当と愛寵の中で育てられた。ふた親は常に女ひめについて聴した。「東国では、あなたが、あの偉大な山の祖おやのかみ慇神さまの一番の孫なのですよ」と。孫娘はおさな心に高い誇りを感じた。

ふた親は、なお、祖父の神の偉大さを語るにこういう言葉を使った、「なにしろ、西国の山々はもちろんのこと、東国でも、福慈とか、この筑波とかいう名山には必ず、こどもをお遺しになり、山を拓かすと共に、眷属さかえの繁栄をお図りになつた方なのだから」と。

祖父の偉れた点を語ることは、また、その孫娘に偉れることを
しやうよう 愆しやうよう 憑しやうよう することでもあつた。

ふた親は、自分たちのことに就ては「わたし達は、何というこ
 とはない平凡なものさ。けれども、山を拓くことにかけては、こ
 れでも人知れない苦勞はしたのものさ」

ひめ 女は、幼いときから、礼儀作法を仕込まれた。女の嗜たしなみになる

遊芸の道も仕込まれた。しかし最も躰しつけに重きを置かれたのは生
 活の調度の道だつたことは、ふた親の性格からして見易き道理で
 あつた。麻野には麻を蒔まき、蚕時こどきには桑子くわこを飼う。——もし鯛が
 手に入つたら蒜ひると一しよにひしお酢にし即座の珍味に客に供する。
 もし小江さえの葦蟹を貰つたら辛塩を塗り白について塩にして永く貯

えの珍珠とする。こういう才覚が母によつて仕込まれた。女は歌垣に加わつて歌舞する手並も人並以上に優れたが、それよりも、繭を口に含んで糸を紡ぎ出し、機糸の上を真櫛でもつて搔き捌くさば伎倆の方が遙に群を抜いていた。

女は容みめ貌かたちも美しかつたので、かかる才能と共に、輩下の部落の土民の間で褒ほめものにされた。ふた親にとつては自慢の総領娘となつた。

ふた親にとつては姉に当り、自分にとつては伯母に当る駿河能するがの国の福慈の女神のことについては、どういふものかふた親はあまり多くを語らなかつた。語るのを好まないようだつた。強いて訊くと「あんな伯母さんのことを気にかけるものではありません」

「仔細あつて私たちは交際つきあつてはいけません」「あれで、なかなか裏に裏のある女でね」「あんな大きな山に住えば誰だつて評判はよくなるさ。いつてみれば運のよい女さ」「私たちと違つて苦労知らずの女さ」「女のことは何一つできないあれが、どうして評判がいいのだろう」まずは悪評に近い方だった。しかしそれでいて、人々がふた親の目の前で福慈岳と女神のことを褒めると、ふた親は女神は自分たちの姉であることを明して、近しい眷属であることを誇つた。

水無瀬女は、ときどき山の峯の鞍部のところへ上つて、伯母の山を眺めた。煙霧こそ距つれ、その山は地平の群山を圧して、白く美しく秀でていた。

「やっぱり、立派だわ、うらやましいわ」

と声に出して言った。そしてふた親はいかにあれ、女神があの山の如きであるなら、どうか自分もあの伯母さんのようになり度いものだと、理想をかの山に置いた。

女にだんだんもの心がつき、比較によつて自分と他とを評価する力が生れて、福慈岳の評判を聞いてみると、その秀でさ加減はあまりにも自分の資格とはかけ離れたものであつた。積といい量といい形といい、もはや生れながらにも及びつかない素質の異りがあると感じないわけには行かなかつた。一つ山の眷属の女でどうしてこうも恵まれ方に違いがあるのだろうか。女は福慈岳を眺めて、美しさよりぬけぬけとすまし返っているような感じが眼につ

くようになつた。

「お伯母さまが、なにもかにも眷属中の女の良いところのものは一人で持つてらしつてしまつたのだわ」

うらやましさが嵩じて嫉^{ねた}みともなつた。

「だから、あたしのような屑の女も、眷属中にできるのだわ」

そして、ふた親がとかく福慈岳に対して反感を持つような態度であるのは、平凡が非凡から受ける無形の圧迫から来るものであること、また、自分に山の祖神の嫡孫の氣位を高く持たせ、それに相^{ふさ}応わしい偉れた女に生い立たしめようとするのも、伯母に対するふた親の無意識の競争心から来るものであることを感付かないわけにはゆかなかつた。

「駄目々々。偉くなることなんて。あたしに、さっぱりそんな慾はなくつてよ」

捨てるともなく誇りと励みに背中を向けかけると、ふた親が説く、山の祖神の偉さというものより部落の間の噂に遺っている山の祖神の偉からざる方面のことが女には懐しまれて来た。

祖父さまは山中の猪の相撲場で、猪の仔の瓜わらべと遊び戯れているとき、猪の親に襲われ、牙にかかつてお果てなされた。祖父さまは娘の福慈の神のつれない待遇を恨まれ、娘の神に誼じぎいをかけたのみか、執着は、峯のしら雪に消え痕ともなつて自形じぎようの人型をとどめられた。それは稚氣と、未練であるでもあろう。それゆえ、ふた親は自分に秘して語らない。しかし部落の土民たち

がこれを語るときに現す、山の祖神に対する親しげな面貌よ。稚氣と未練に含まれて、そこに何かあるに違いない。

女は年頃になつた。相変らずこの界限の褒めものの娘であり、ふた親の自慢娘ではあつた。女はもはや山の鞍部へ上つて伯母の山の姿を眺め見ることはせず、理想なるものを持たず、ただその日その日を甲斐々々しく働いた。雁かりがね金が寒く来鳴き、新治にいぼりの鳥羽の淡海も秋風に白浪立つ頃ともなれば、女は自分が先に立ち奴たちを率いて、裾わの田井に秋田を刈つた。冬ごもり時しも、旨飯を水に醸かもみなし客を犒ねぎらう待酒の新酒の味はよろしかつた。娘はどこからしても完璧の娘だつた。待酒を醸む場合に、女はまずその最初の杯の一杯を、社やしろうに齋いっき祭つてある涙石に捧げた。それ

は祖父の山の祖神が命終のとき持てりしものの唯一の遺身かたみの品とされていた。

年頃になつて、完璧の娘で、それでいて女に男の縁は薄かつた。異性にしていい寄るかつこう恰好かつこうをするものもあるが、それは単に年頃にかかる娘への愛想か、岳神の総領娘に対しての敬意を變貌させたよなもので、恰好だけに過ぎなかつた。もとより女自身からは乗り出せない。そういう触手は亀縮かじかんでいる。双親を通して申込まれる山々からの縁談も無いことはないのだが、ぜひ自分でなくてはと望むらしい熱意もとある需めもととは受取れなかつた。良山良家の年頃の娘でさえあれば、一応、口をかけて問合わされる在り来りのものに過ぎなかつた。双親はまた、自分たちの眼からしてた

いしたものに思い^な做している娘を、滅多な縁談にやれないといひ張った。相手の山や岳神を詮議して、とかくそれ等に不足を見付け出した。娘の婚期は遅れて来た。双親は負け惜しみもあり、なに、それなら、水無瀬は筑波の岳の跡取にして、次の代の筑波は女神、女族長でやらして行くといっている。

水無瀬は何となく生きて行くことにくさくさして来た。さほど醜くもなく、これだけ物事ができる自分が、せめて、どうして男の縁が薄いのだろうか。女が男に対する魅力とは、全然こういう資格や能力とは関係ないのか。それにつけても久振りに伯母の福慈の女神のことが思い較べられて来るのであった。

往來の道が拓けるにつれ、東国の西の方よりこの東国の北部の

方へ入り込んで来る旅人が多くなつた。女はその人々の口からして伯母の女神のその後の消息を少しずつ詳しく聴くことができた。「福慈の女神はだんだん若くなるようである」と旅人たちはいつた。七つ八つの童女の容貌を持ち、ただその儘ままで身体は大きい。怒るときは、山腹にかみなり稲妻を起し満山は暗くなつた。笑うときは峯の雪を日に輝して東海一帯の天地を朗なものにした。悲しむときは、鳴沢に小石が滑り落ちる音が止めどもなくしくしくと聞えて来る。

平野に雲の海があるとき、霞棚引けるとき、それ等を敷しきむ 蕙しろにして、幽婉な寝姿が影となつて望まれる。それは息もないようになしずかな寝姿であり、見る目憚はばからぬこどものように仰あおむき踏みは

だかつた無邪気な寝姿でもある。

しかも、女神の慧さとさと敏感さは年経る毎に加わるらしく、天象歳時の変異を逸早く丘麓の住民たちに予知さすことに長けて来た。従来、ただ天気の変りを予知さすだけに、峯の頂の天に掲げ出した、笠なりの雲も、近頃では、その色を黒白の二つに分け、黒の笠雲の場合は風雨のある前兆とし、白い笠雲の場合は風ばかりの前兆としたようなこまかさとなつた。

幾人の神人や人間が、この女神に恋をしたことであるだろう。女神は一々、まじめに、その恋を求むる男たちに見向つたらしい。だが何人がこの女神の逞しい火の性、徹る氷の性に、また氷火相闘つ矛盾の性うに承け応えられるものがあつたらう。彼等のあるも

のは火取り虫のように却って羽を焼かれ、あるものは虫入り水晶の虫のように晶結させられてしまった。矛盾の性に見向われたものは、裂かれて二重の空骸となった。それ等の空骸に向って女神は、涙をぼたぼた垂しながら、撫なでさすり「可哀相に、いのちの愛までは届かぬ方」というというが、誰もその意味を汲取ったものはない。ただ女神にそういわれて撫でさすられた空骸は、土に還ると共に、そこからはこけ桃のような花木、薊あざみのような花草が生えた。深山榛みやまほんの木の根方にうち倒れた、醜い空骸は、土に還ると共に、根方に寄生して、そこから穂のような花をさし出すおにくという植物になった。

生けるものに失望したのか、それとも自分自身現実離れして行

くのか、女神の姿は、住いの麓ふもとの館をはじめ地上ではだんだん見受け悪くなった。空間に浮ぶ方が多くなつた。形よりも影、体よりも光り、姿よりも匂いで、人の見ゆる方まみが多くなつた。水にひたす影に於てこそ、もつとも女神の現身うつしみをみることができ。

見ぬ恋に憧れたあちこちの若い河神たちが、八人と集つて来た。彼等は思い思いの麓の野に土を掘り穿ち水うがを湛えた。水に映る女神の影を捉えようためである。たまたま女神は湛えた水の一つに姿をうつす。その場を張り守っていた河神は猶予なく姿を掴む。うたゐる水の音のみ高く響いて、あとに残つたものは掌から肘に伝わる雫のみである。一とき聞くに堪えないような失望の呻き声が聞える。だが河神は肘の雫を啜つていう「私はこの女神のため

に諦めということを取失わされてしまった。消ゆるかに見えて、

また立つ漣さざなみ……」

岳麓にできた八つの湖、その一つ一つを見まもる八人の河神の若い瞳。その辛抱を試しみるように、湖面に、ときどきさざ波が立つ。

旅人たちの話を綜合してみても、いちいち驚かれる伯母が持てるものである。水無瀬女は、また「お伯母さまが、なにもかにも持つてらしてしまつたのだわ。眷属中の良いところのものを一人で」と託かこつたが、男のころまでかくも牽くということを聴くと、うらやましが嵩じてなつた嫉みは、更に毒を加えて燃えさせられ、激しい怒りとなつた。女は「お伯母さまが、なにもかにも奪と

つてつてしまいなさるのだわ。あたしの分まで……」
さないいわけにはゆかなかつた。女のころは、決闘目はたしめとなつて来た。かにかくに自分は一度伯母に会い、この詰なじらないでは措けな
いものをうちかけてみたい気持ちに、迫られた。

あのつんとすまし、ぬけぬけと白膚を天に聳そびえ立たしている伯
母の山が、これだけは拭えぬ心の染班しみのように雪消ゆきげの形に残す。
伯母にとつては父、自分にとつては祖父の執着未練な人型なるも
のを見度かつた。それを見ることによつて自分に一ばん懐しまれ
る性格の祖神にも会えるような気がした。

母はやや老い、筑波の岳神の家では、働きものの水無瀬が主婦
のような形になつていた。世間の男たちからは距てを構えられる

女も、家の中の弟妹たちからは母よりも頼みとされ、親しまれた。彼等は外なぞから帰つて来ると、まず「姉さまは」と、探し求めた。

水無瀬はその弟妹の中の上の弟を語つて、三月の行糧を、山の窟いわやに蓄えた。姉の確りしたところで、いつも気を引立てられていゝる勝気にも性の弱い弟は、この秘密で冒険な行旅を、姉の敢行力の底かけに在つて、共々、行い味われたので、一も二もなく賛成した。さしむかう鹿島の崎に霞たなびき初め、若草の妻たちが、麓の野うはぎに莪蒿摘みて煮る煙が立つ頃となつた。女は弟を伴つてひそかに旅立つた。うち拓けた常識の国から、未萌の神秘の国へ探り入る気ずつなさはあつたが――

甲斐々々しくとも足弱の女の旅のことである。女が駿河路にか
かったときには花後の櫓おうちの空に、ほととぎす鳴きわたり、摺すらず
とも草あやめの色は、裳に露で染った。

近づくにつれ、いよいよ驚かれるのは伯母の領うしはく福慈岳の姿で
ある。姪の女はただ圧倒された。これがわが肉体の繋りかよ。し
かもこのものに向つて、争あらがおうと蓄えて来た胸の中のものなどは、
あまりに卑小な感じがして、今更に恥入るばかりであつた。この
儘に帰ろうか。それも本意ない。うち出して会おうとするには、
すでに胸中見透しりごされている気がして逡巡しりごまれた。願ねぎかくるは伯
母のまにまにである。そしてこっちは、ゆくりなく、漂泊さすらう旅の

路上で、ふと伯母に見出されたという形であらしめ度い。胸中いかに見透されていようと少くともこの形の態度なら超越の伯母に對し、初対面の姪むすめの恰好はつけられる。

水無瀬女は弟を伴つて福慈岳の麓の野をあちらこちらと彷徨つた。嘗て常陸の山に在つて旅人から聞いた話の、八つの湖に女神の姿を待ち侘ぶ河神たちの姿も眼の前に見た。河神たちの若い瞳は、陽かげろう炎を立てて軟く燃えているが、姿は骨立つて痩せていた。冬はかくて痩せ細り夏に雨を得て肉附くことを繰返しながら、瞳は一途にあえかなるものに向つて求めているのだと土民はいった。女はその瞳の一つだも羸かち得たなら自分はどんなに幸福だろうと考えないわけにはゆかない。

恠い死の空骸から咲き出でたという花木、花草は、今を春と咲き出していた。高く抽き出でた花は蒐あつまつてまぼろしの雲と棚曳き魂魄を匂いの火気に溶かしている。林や竹藪の中に屈くぐまる射干しやが、春蘭のような花すら美しき遠つ世を夢みている。これをしも死から咲き出たものとしたなら、この花等は自らの花をも楽しく謳っているようである。ぴんちよぴんちよ、たちからたちから。北から帰つて来たという小鳥たちは身籠る季節まえのまだ見ぬ雄を慕うて、囀さえずりを立てている。

麓の春の豪華を、末濃おそいの裳にして福慈岳は厳かに、また莞爾かんじとして聳そびえ立たっている。一たい伯母さんは幾つの性格を持っているのか知らん。

晴れた日は全山を玲瓏と人の眼に突付けて、瑕きずもあらば、看よ、看よと、いつてるような度胸のよい山の姿である。曇つた日は雪とばりの帳深く垂れ籠めて、臆した上にも病的な女が、人嫌いし出したようである。

くさぐさの山の変化を見経ぐり、見分けながら、女はまだ伯母の女神の姿に遇わない。弓矢を提たずさえて来た弟は、郷国くにの常陸には見受けない鳥獣を猟つてその珍しさに日の過ぐるのを忘れていたが、それも飽きていうようになった。

「伯母さんなんかに遇つたつてつままないじやないか、もう帰ろうよ」

部落の土民の間では、こういういい慣ならわしがあつた。「それはた

ぶん、女神が季節の変わり目で、夏の化粧をされてるからだろう。でなければかわや厠なつとくに上られてはこされているからだろう」女神の化粧は自分で納得なつとくゆくまで何遍でも仕代えさせられるので永い。女神の上厠は、はこそのものよりも、うつらうつら物うち考えられるのでこれも永い。厠神の植山はにや姫、水みず匿はのめ女も永く場を塞がれて手を焼くそうであるという。

若い瞳がうち看守る八つの湖、春を敷しきたえ妙の床の花原。この間にところどころ溶岩で成れる洞穴があつた。形よき穴には生けるものが住んでいた。形悪しきには死にかかっているものが住んでいた。

さまよ彷徨いあぐねてこの洞穴の一つのまえを通りかかった水無瀬女

は、穴の中からうめき声に混つてこういうのを聞いた。

「あの方は、いのち、いのちというが、ああ、いのちは、健康であるときにのみ有意義なのだ、この病める姿の醜さ。昼も夜もそのための尽きぬ嘆きに、ああ、わたしは、わたしに残れる僅かないのちの重味にさえ堪え兼ねている」

「この堪えられない程、烈しい息切れと、苦しい動悸のする身体。つくづく情無さを感じずる。呼吸を吸い込むと胸の中に枯枝か屑のようなものがつかえ、咽喉はいらいらと虫けらが這うように痒い。その不快さ。咳、濁つて煤けた咳。六つも七つも続けさまに出る。胸から咽喉へかけて意地悪い痩せこけて骨張った手が捏こねくり廻しているようだ。辛い。わたしは顔をしかめる。思わず口を醜く

開く。さぞ醜いさまだろう。この辛さ醜くさを続けてまで、いつまであの方はいのちを担って行けといわれるのだろうか」

「こんなに痩せ細ってしまつて、この先どうするのだろうか。私とはともかくこうして二十七まで生きただから、もう死んでもいいのだと思うのだが。一日々々と醜く苦しませないで早く死なせて貰いたい。丈夫な時には、希望も、歓楽も、恋もあつたが、病氣になつてみれば何にもない。死ねばどうなるのか私はそれを知らない。病が苦しいから死のうと思うだけだ」

「蛙の声が穴の中まで聞えて来る。外は春なのだなあ。蛙よ、唄つてくれ唄つてくれ。私はお前の唄に聞き惚れつつ、さまざまに思い出の中に眠るのが今はたった一つの楽しみなのだ。死という

ものの状態に似ているらしい眠りに就くことが……」

その声は妙に水無瀬女の心に染みた。この時代に在つては、およそ生きとし生けるもので、生こそは欲すれ、死を望むことはいかなる条件の代償を得るにもせよ心に無いことだった。従つてその声のいうところは女に珍らしかつた。女は、ここにも女神のため^{けが}に出来た奇妙な怪我人が一人いるのかと、久振りに伯母^{ほらあな}に対する義憤を催して、弟はその辺の狩に出し遣り、自分は洞穴の中へ入つて行つた。

弟が用意して呉れた僅な松^{たきまつ}明の灯を掲げて、女は洞穴の中へ入つて行つた。齒^{しだ}朶が生い囲んでゐる入口の辺を過ぎると、岩窟の岩肌^{こうもり}が灯に照し出された。頬を掠めて蝙蝠らしいものが飛ん

で女を驚した。

僅な松明の灯に照し出される岩肌は、穴の屈曲に従つて 拗ねじけた瘤こぶをつけ 波打つ襞ひだを重ねる。岩室がぼっかり袋のように広くなつたところもある。洞内の貫きよう、壁かべ皴ひびの模様、かてて加えて、岩徹る清水は岩の肌を程よく潤して洞は枯石の成るところのものとは思えない。女はなにかしら柔かくふによふによしたもののの中を行くと思ひ倣なされて来た。しかもそのなにかしらと感じていたものが、ふと生けるものの、女性の胎内とはかかるものではないかと思ひ浮べられて来たときに、女はわれ知らず、身体が熱くなり、顔の赭あかくなるのを覚えた。

岩角を一つ曲ると、かすかな燈火の灯かげに照し出され、一人

の若い男が、天井から垂れ下っている大きな乳房に吸い付いて余念もなく啜っている不恰好なさまを見出した。女はつい松明を取落し「あらっ！」と叫ばざるを得なかった。

この若い男は、科野国しなのの獣神であつて、福慈の女神により人間に化せしめられつつあるうち病氣をしてしまったのでこの洞窟内で療養せしめられているのだといった。

男の吸う乳房は、やはり岩瘤の一つで天井から垂れ下つたものであるが、尖には乳首の形もあつた。これに伝わって滴る雫は、靈晶の石を溶し来て白濁し、人間の母が胸から湧かすところの乳の雫そのままであつた。

若い獣神はいう「この乳を、あの方は、生に対しても根が尽き

果て、さればといつて死へも急げない、生けるものに取つていちばん遣り切れないときに飲めと仰おつしやるんです。そのときがいちばん利くと。でも、そういう場合に飲もうとする努力は苦しいものですね」

若い獣神はしきりに咳き込んだ。水無瀬女は背を撫でて介抱してやった。

燈火のかすかな灯かげで女は獣神をよく見た。眼は落ち窪み頬は瘦こけ削そげているが、やさしいたちの男らしかった。獣神にもこんな男がいるのか。女は眼を瞞たつた。ただ顔立ちに似気なく厚肉の唇は生なまの情慾に燃え血を塗つたようだった。男は荒い毛の獣の皮を着ていた。その衣の裾が岩床に敷くまわりに一ぱい痰たんが吐

き捨ててあつた。その痰の斑には濃い緑色のところと、黄緑色のところと、粘り白いところとある。淡く白いのは唾らしく無数の泡を浮べていた。眉をひそめて、それを眺めていると見て、男はそれを指しながらいった。

「こいつ等が、咽喉にうによしして停滞しているときは、全く無作法な獣たちですね。私はそれが邪魔だから吐き出す。だがその度びに私から獣としてのいのちは吐き出されて行き、そのあとに果して人間のいのちが私に盛り上つて来るか判りやしません。いくらあの方が神仙の乳を飲まして下すつたつて……」

いうことがどういうふうに女に響くかぬすみみ窺視したのち、

「ねえ、お嬢さん。それで私はこの憎らしい、私を苦しめる痰を、

吐き出すときに、一々、舌の上に載せて味ってやるんですよ。獣のいのちの名残りにしてそれには淡く塩辛いのもあり、いくらか甘くて——」

といいかけたとき、女は急いで袖を自分の鼻口に当て手を差し出して止めた。

「もういいもういい。話は判つてよ」

女は、この類たぐいで、この若き獣神が生きとし生けるものの醜悪の底の味いを愛惜し、嘗め潜つて来たであろうことを察して、悪寒かんのある身慄かいをした。と同時に不思議や亀縮かじかんでいた異性に対する本能の触手が制約の撻むちを放れてすくと差し延べられるのを感じた。

男は苦しく薄笑いしながら、

「じゃ、こんな話は止めに行きましょう、だがね、お嬢さん、洞の外は、すっかり春でしょう。青々とした春でしょうねえ。うらやましいこった」

といったときには、女はもうこの男の傍を離れ難くなっていた。女は、

「たとえば、この男が、伯母さんに失恋した、いわば伯母さんの剩りものにしたところで、いいや、あたしはこの男を得るかも知れない。あたしはもう伯母さんに嫉みも恨みもなくなった。伯母さんにはまた伯母さんとしてのたくさんな担いものがあるらしいから」

胸にこう自問自答して、女は洞の中の男の傍に介抱すべくとどまつた。

山は晴れ、麓の富士桜は、咲きも残さず、散りも始めない一ぱいときである。洞から水を汲みに出た水無瀬女は、浅黄の空に、在りとしも思えず、無しと見れば泛ぶかの気の姿の、伯母の福慈の女神に遇つた。

女神はこころと笑つた。

「水無瀬女よ、めぐし姪姫よ。山と岳神と二つになつてゐる時代は去つた。しばらくは人を中心にあめつちは支えられる。ただし、神を享けぬ人は低かろう、ただし獣の力を帯ばない人は弱かろう。

看よ、看よ。わたしは山一つを人に遺して置く。山一つ。すべての訓えはこれにある。岳神のわたしは失^うする。失^うすることの楽しさ。失^うするということはあんた方の中に得ることである。あんたが悩むとき、美しくあるとき、青春に萌ゆるとき、わたしは在る。ほんとうに在る。あんたの肉体そのものに感ぜられるまでに、わたしは在る。今ぞわたしは失^うする。さくらの空に朗々と失^うすることの楽しさ」

またころころと笑う声は、珠うち鳴らしつつ距り行くが如く、霞を貫きおお空の宙にまであとをひいていつとしもなく聞えなくなつた。

福慈の岳の噴煙は激しくなつて、鳴動をはじめた。

不二の嶺ねのいや遠長き山路をも妹いもがり許訪へば氣けに呻よはず来きぬ

富士の西南の麓、今日、大宮町浅間神社の境内にある湧わくたま玉池と呼ばれる湛えた水のほとりで、一人の若い女が、一人の若い男に出会った。

頃は、駿河国という名称はなくて、富士川辺まで佐賀さがむ牟国と呼ばれていた時代のことである。

若い男は武装して弓矢を持っている。若い女は玉など頸にかけ古びてはいるがちよつとした外出着である。若い男は女をみると、一時立竦たちすくむように佇とまり、まさ眼には見られないが、しかし身体

中から何かを吸出されるように、見ないわけにはゆかないといった。

女は、自分の前に佇った男は、身体の割に、手足が長くて、むくつけき中に逞しさを蔵している。獣のように毛深い。嫌だなと思うほど、女を撃ち融かす分量のものをもっている。女は生れ付きの女の防禦心から眼をわきへ外らした。しかし身体だけは、ちよつと腰を前横へ押出して僅かなしなを見せた。池のほとりの桔梗ちこうの花の苔つぼみをまさぐる。

しばらく虚々実々、無言にして、天体の日月星辰を運行めぐる中に、新生の惑星が新しく軌道を探すと同じ叡智が二人の中に駈け廻めぐつた。

やがて男は、女の機嫌を取るように、ぎごちなく一礼した。

女も、一礼した。

今度は、男は眼に熱情を籠めて、じーつと見入った。女は下態はそのままで、上態は七分通り水の方へ振り向け、ふくふく水溜りの底から浮く、泡の湧玉を眺めている。手は所在なさそうに、摘み取った桔梗の枝の蒼で、群る渚の秋花を軽くうっている。

男の心の中に、表現し得ずして表現し度い必死の気持が、齒噛みをした。

事実、男の齒はぱりぱりと鳴った。

男は切なく叫ぶ、

「この大根おおね、嫁とつかずであれ、——今に」

といい、あとをも見ずに駈け去った。その走り方は、不器用な中に鳥獣のような俊敏さがあつた。

女は、きゅつきゅつと上態を屈めて笑つた。男が精一杯のやけ力を出して自分をこの蕪野な蔬菜に譬えたのがおかしかった。

女は笑いながら、しかし拵こしらえたものでなく、自然に、このことをおかしみ笑える自分を、男に見せられなかつたのを残念に思つた。そこにすでに男の虚勢を見透し、見透すがゆえに、余裕しやく綽々とした自分であることを男に示したかつた。その余裕から一層男を焦じらせて、牽付け度い女の持前の罪な罨あもあろう。

笑つたあとで、女は富士を見上げた。はつ秋の空にしんと静もり返っている。山は自分の気持の底を見抜いていて、それはたい

したことはない、しかしいまの年頃では真面目にやるがよいといっているようでもある。

高い峯を起して、鳥が渡って行く。次に次に。

それは水溜りの泡の湧玉のように無限に尽きない。絶頂をわぎわぎ越す鳥は純な鷺だけだといわれているが、あの鳥はそうなのか。

女は、

「ばかにしている」

といつて、つまらなさそうに、桔梗の荅の枝を水溜りに投込んだ。落魄おちぶれた館へ帰って行った、

二三日経って女はまた湧玉の水のほとりで、男と会った。男は、

手頃に傷けてまだ息を残さしてある雄鹿を小脇に抱えていた。女を見出すと、片息の鹿を女の足元に抛り出した。それから身体中が辛痒ゆい毒の齒に噛まれてもするようにくねらせた。眼から銚を突出すよう女を見入った。

女は思慮分別も融けるような男の息吹きを身体に感じた。しかし前回での男とのめぐり合いののち、富士を眺め上げて、それはただ血の気の做すわざなんだか、もつと深く喰入るべきものがあるような気がしたのを想い出して、自然と抑止するものがあつた。「どうなしたの」

とすずろのように訊いた。女は足元に投出された血だらけの矢の雄鹿を見ても愕かず、少しわきへ寄っただけであつた。男の何

かしら廻り諄くどい所作の道具に使われて、命を失いかけている小雄さお鹿を、その男と共に、無駄なこと犠牲になった悲運のものと思うだけだった。ただ、しゆくしゆく鳴きながら苦しみを訴える鹿の眼の懸命に戸惑う瞳の閃きに一点の偽りもないのを見ると掻き抱いてやり度いようだった。

男は口を二三度もぐもぐさしたが、やはりいい出せなかつた。女の方が却つて男の不器用を察して気づつない思いを紛まぎらすために、わきを向きながら小さな声で唄つた

など 黥さける利目とめ

など 黥さける利目とめ

これは、男の顔を、ちらと見たとき、自然と思ひ浮べられた歌

の文句だった。

この薑はじかみ、口疼ひびく

男は、叫ぶと猛然、女の代りに鹿に飛びかかって、毛深く逞しい拳を振り上げて、丁々と撃った。すでに傷き片息になっている毛ものごととて、躑もがくまもなく四肢をくいくいと伸して息絶えた。なべてものの死というものの、何かおかしみがありながら頭を下げずにはいられない神秘を女は見透した。

「なんて、可哀相なことをなさるの」

女は務めのようにそういった。

男は、夢中で狂気染みた沙汰を醒めて冷く指摘されたように、口衝くぐまり、みると額に冷汗までかいている。「この大根、嫁かずに

あれ、——今に「そういうかと思うと、たちまち、男はまた、不器用にも俊敏に去った。

女は、何となく本意なく、富士の高嶺を見上げた。その姿は、いま眼のまえに横っている小雄鹿の死と同じ静謐さをもつて、聳えて揺り据っている。今日も鳥が渡っている。

男はそのかみ、神武御東征のとき、偽にしもの者土蜘蛛と呼ばれ、来くめ目の子等によつて征服されて帰順した、一党の裔すえであつた。その祖先は天あめのとみのみこと富命もろうじが齋部の諸氏もろうじを従え、沃壤地よきところを求まき、遙とほに、東国の安房の地に拓務を図つたのに、加えられて、東国に来り住んだ。種族の血を享けてか、情熱と肉体の逞しさだけあつて、

智慧は足りない方だった。彼は強いままに当時の上司の命を受けて、東国の界隈の土蜘蛛の残りの裔を討伐に向った。たまたまこの佐賀牟の国の富士の山麓まで遠征した。

一方女は水無瀬女と獣の神の若者との間から生れ出て多くの門裔がこの麓の地に蔓はびこつたその宗家の娘であつた。祖先の水無瀬女から何代か数知れぬ継承の間に、宗家は衰え派出した分家、また分家の方が栄えた。どういうわけであろう。界隈の昇華した名家々々の流れを相互に婚姻を交えている間に、家の人間に土より生い立てる本能の欲望を欠き、夢以外に食慾が持てない咀嚼力の精神になつてしまつたのも原因の一つであろう。この女も人情のことは何でも判つていて、あまり判り過ぎるが故に、男に興味を持

てなくなつたという側の女となつてしまつていた。

ところがこの頃、湧玉の水のほとりで、度び度び遇う男は、女の醒めたものを攪乱する野太く、血熱いものを持つている。下品で嫌だなど思いながら、無ければ寂しい気がする。そして興味を牽いて救われるのは、その男が唾者のように表現の途を得ないで、いろいろに感情の内爆や側爆のこういう所作をすることである。

それから後も、男は、得意の弓矢の業をもつて、麓に住む荒い獣を半殺しの程度にして狩り取り、湧玉の水のほとりに待受けていて、女を見ると、屠^{ほぶ}り殺した。

小牛ほどの熊を引ずつて来て、それに掌で搏たれ、爪で搔れながら彼は、組打ち、小剣で腹を截り裂いた。截り裂くと同時に、

彼は顔をぐわと、腹の腑の中に埋めた。血潮が迸る。彼は頭を腑中に抉こじていたが、すぐ包もののような塊を銜くわえ出した。顔中のみか鬚髪まで血みどろになって恐ろしく異様な生ものに見えたと銜えた包もののような塊からも繋る腑の紐からも黒いほどの獣の血が滴った。彼はそうしながら、しよんぼりとして女の前に立つ。これはなんのつもりだろう。すると、不思議に、女は顔蒼ざめさせ体は慄えながら一種の酔心地とならざるを得なかった。生れて始めて力というものが身の中に育まれるのを感じた。

だが女はこの気持を通しての、酔えるままにこの男と融け合つたならどういふところへ行くであろうと危く思う。

女は、そ知らぬ顔をして富士を見上げた。碧い空をうす紫に抽

き上げている山の峯の上に相変らず鳥が渡っている。奥深くも静かな秋の大山。

女は、所詮、どっちかからいい出さねばならない羽目はかが近付いているのを悟った。母親も気付いて相手の身分をはか図り近頃はぐずぐずいう。しかしこの情熱を生のままでは、たとえこのまま二人は結ばれたにしろ、のちのあくどさが思い遣られる。

その日はやはり「この大根、嫁かずであれ、——今に」といつて駆去った男が、その翌日、何にも獣は持たずに水のほとりに来た。女を見ると、矢庭に弓矢を女に向けて張った。男はこの頃の興奮と思ひ悩みに、いたく痩せ衰え、逞しい胸で息せき切っている。かくしてもまだ口ではいい出せず、弓矢をもって代弁させな

ければならない、荒い男の高ぶった憶しごころを女ははじめて憐れとみた。

女は、手で止め、ふと思ひ付き

「朝な朝なこの水に湧く、湧く玉の数を、数え尽しなさったら」
寂さびしく笑いながらいった。男は弓矢をそこに抛ほうり出し、ぐずぐずと水のほとりに坐した。

富士が生ける証拠に、その鼓動、脈搏を形に於て示すものはたくさんあるが、この湧玉の水もその一つであった。朝日がひむがしの海より出で、山の小額を薔薇色に染めかけるとき、この水の底から湧く泡の玉は特に数が多い。夜中に籠れる歎気を吐くので

あろうか、夜中に凝る乳を粒立たすのであろうか、とにかく、この湧玉をみて、そして峯を仰ぐとき、確に山の眼覚めを思わせる。泡の玉は暗い水底より早味そのものの色である浅黄色の中に、粒白の玉として生れ出で、途中真珠の色に染め做されつつ浮き泡となり水面に踊って散り失す。あなやの間ではあるが、消えてはまた生まれ、あちらと思えばこちら、連続と隠顯と、ひととき眼を忙失させるけれども、なお眼を放たないなら、眺め入るものに有限の意識を泡にして、何か永遠に通じさすところがある。ふつつ、ふつつ。仰げばすでに、はつきり覚めて、朝化粧、振威の肩を朝風に弄なぶらせている大空の富士は真の青春を味うものの落着いた微笑を啓示している。

男は今度、女が来たとき

「数は数え終えたよ」と微笑した。

しかし、女はなお、男を試みて

「夕な夕な山を越して来る、鳥の数を数えなさったら」といった。

男は秋の夕山を仰いで、渡り来る鳥群に眼をつけた。

陽が西に沈むにつれ山は裾から濃紫に染め上って行く、華やかにも寂しい背光に、みるみる山は張りを弛めて、黒ずみ眠って行く。なお残る茜あかねの空に一むれ過ぎて、また一むれ粉末のまだら。

無関心の高い峯の上を、その鳥群のまだらだけが愛を湛えて、哀しい大空にあたたかい味を運んで行く。

今度女が来たとき男はいった。

「あの山を越す哀しい鳥の数も数え尽した」

「もう、いいわ、じゃ、ね」

さぬらくは玉の緒ばかり恋ふらくは不二の高嶺たかねの鳴沢のごと

駿河の海磯むしべ辺に生ふる浜つづらいまし汝をたのみ母にたがひぬ

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年9月22日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第五卷」冬樹社

1974（昭和49）年12月10日初版第1刷発行

初出：「文芸」

1940（昭和15）年11月号～1941（昭和16）年4月号

入力：穂井田卓志

校正：高橋由宜

1999年10月14日公開

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

富士

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>